
海外研修

Ⅲ 海外研修

1 海外研修概要

1) 訪問プロジェクト

「南スラウェシ州貧困対策支援村落開発プロジェクト」

「市民社会の参加によるコミュニティー開発技術協力プロジェクト」

2) 研修期間

国内 2006年11月13日(月)～22日(木) 8泊 9日

3) 研修参加者

NGO参加者 6名

JICA参加者 5名

合計 11名

4) グループ分け

1 グループ	
○	鳥飼真紀子
◇	神藤はるか
○	下田 寛典
◇	渡辺 英樹

2 グループ	
◇	齊藤 恵
○	山田 千晶
○	植田 貴子

3 グループ	
◇	伊東 里佳
○	杉本 正次
◇	中村寿美子
○	酒井絵里香

○ : NGO、◇ : JICA



5) 海外研修日程

月 日	時 間	内 容
11月13日(月)	09:30 11:20-17:20 19:00-20:00	成田空港集合 JL725 (成田→ジャカルタ) PKPM プロジェクトブリーフィング (宿泊:ジャカルタ)
11月14日(火)	09:00 10:00 13:00-16:15	インドネシア事務所訪問・安全対策ブリーフィング、打ち合わせ ジャカルタ空港移動 GA610 (ジャカルタ→マカッサル) グループワーク (宿泊:マカッサル)
11月15日(水)	AM PM	州村落エンパワーメント局訪問 州議会副議長(元タカラール県知事)訪問 佐久間専門家、ハサヌディン大学、NGO(LML:元FO)関係者インタビュー(BAKTI) グループワーク (宿泊:マカッサル)
11月16日(木)	AM PM	タカラール県訪問(村落開発局、開発企画局、県会議員、元C/P) ラボ村落およびSISDUK実施村落訪問(3グループに分かれて3村落で村長、住民グループ、NGOファシリテーターインタビュー) 日本人専門家との夕食会 (宿泊:マカッサル)
11月17日(金)	AM PM	マリノへ移動、グループワーク NGOファシリテーターインタビュー 日本人専門家・ローカル専門家インタビュー グループワーク (宿泊:マリノ)
11月18日(土)	AM PM	レンケセ村訪問 村長、集落長、住民グループインタビュー マカッサルへ移動 (宿泊:マカッサル)
11月19日(日)	AM 16:10-17:20	グループワーク(BAKTI) GA603(マカッサル→ジャカルタ) (宿泊:ジャカルタ)
11月20日(月)	10:00-12:00 14:00-16:00 22:10-07:00+1	インドネシア事務所にてグループワーク(研修報告会準備) 研修報告会 ジャカルタ発(JL726)→成田着(翌朝) (機中泊)
11月21日(火)	07:00 07:00-12:00 13:30	成田着 地球ひろばへ移動 帰国報告会準備 (宿泊:地球ひろば)
11月22日(水)	10:00-12:00 12:30	帰国報告会 解散

*航空便は直行便利用

2 海外研修の成果と総括

武田長久

1) 海外研修のねらい

国内研修では、住民主体の開発を促進するために住民、行政、NGO などのアクターの関係がどうあるべきか、JICA と NGO の事例を基に議論を行った。その中で住民主体の開発を実現するにあたり重視すべき点を考察し、ガバナンスの側面で配慮すべき点に関して検討を行なった。海外研修では実際に現場を訪問して事例を分析することにより、国内研修で見出した重視すべき点や配慮すべき点を確認するとともに、外部のアクターが果たすべき役割や配慮すべき点に関して考察することを目的とした。

2) 訪問案件の選定

インドネシアでの海外研修の視察案件は、国内研修で事例分析を行った JICA の事例である「スラウェシ貧困対策支援村落開発プロジェクト」と南スラウェシ州マカッサルの近くでパイロット活動を実施している「市民社会の参加によるコミュニティ開発プロジェクト (PKPM)」を選んだ。日本の NGO が関連している事例を選ぼうとしたが、インドネシアで活動している日本の NGO の数が少ないことと、プロジェクトサイトが離れていたため、2件とも JICA の事例になった。しかし、PKPM プロジェクトには日本の NGO の関係者が短期専門家として参加しているため、日本の NGO との関連を持つ事例ということができる。

スラウェシ貧困対策支援村落開発プロジェクトは、南スラウェシ州のタカラール県で住民主体の開発事業を支援する県の支援システム (SISDUK) の形成を支援したプロジェクトである。行政が住民の活動を資金的、技術的に助成する仕組みを作り、NGO と連携して住民の社会的準備や組織化、計画策定の支援を行うもので、プロジェクト終了後に対象村が 4 村から県内の全村に県政府により拡大された。一方、PKPM プロジェクトはコミュニティ開発における NGO と地方行政の連携を促進しようとするもので、コミュニティの開発を支援する外部のファシリテーターの育成を行っている。この二つの事例は住民主体の開発を支援する事例として参考になり、その中で住民や行政、NGO の関係性、外部のアクターがどのように関わるのかを考える上で多くの示唆を与えてくれる事例であった。



3) 海外研修の成果

国内研修で議論した「住民主体の開発」における重要な視点をもとに、参加者それぞれ事前に海外研修で特に大事にしたい 3 つの視点を挙げてもらった。研修参加者は 3 つのグループに分かれて個々の視点を共有し、グループとしてみるべき視点を絞り込んでもらった。アクター間の役割、ビジョンの共有、持続性などが共通する視点として出された。事例の分析においては住民、行政、NGO の関係と役割分担を確認し、住民主体の開発を実現するために何が重要か、グループでまとめた視点に基づいて確認するとともに、外部者がどのような関わり方をしているか、そして援助をする私たちがドナーとしてどのような事ができるか、どのようなことに配慮しなければならないかを考察した。

各グループで共通して認識されたことは住民と行政をつなぐファシリテーターの役割が重要であるということである。訪問した二つの事例とも地元の NGO がファシリテーターの役割を果たしていたが、住民に寄り添う形で住民の気づきを引き出す丁寧なファシリテーションの必要性が指摘された。また、アクター間でビジョンを共有することの重要性を認識したが、SISDUK の形成の過程で県行政、NGO、県議会議員などの関係するステークホルダーへの研修を通じた働きかけが重要な役割を果たしたことを確認した。住民主体の開発を支援する行政の役割の重要性についても認識を深めた。

事例を通して多くの学びを得る事ができたが、一方で住民主体というときに住民全員をさすのか、活動に参加する住民グループをさすのか、主体になる住民はどんな人たちか、村落の中の権力構造がもたらす影響などに関しては、まだ疑問が残されている。また、住民主体の開発に関しては事例を通して分析し興味深い議論がなされたが、その中でガバナンスが影響を及ぼす側面に関しては若干分析や議論が弱かった面がある。

住民主体の開発は NGO と JICA の共通する目的になるが、援助する側の外部者の関わり方として、NGO と JICA はそれぞれの強みを活かしたアプローチを取る事ができる。JICA は行政に対するアプローチに強みを持っており、NGO は草の根レベルでの現地 NGO との連携や住民との連携に強みを持っている。それぞれの強みを活かしながらも弱い点を補っていくこともできるが、NGO と JICA が連携して補完しながら協力を行っていくことも可能である。その意味で、今回の相互研修が自分たちの強みと弱みを確認するとともに相互理解を深めて今後の連携を促進する関係作りに役立ったものと思われる。

4) 課題

海外研修では短期間に多くの関係者を訪問し、様々なレベルの関係者にインタビューを行い事例の分析や意見交換を行うことになる。その中で特に今回は住民主体の開発を実現するために大切なことや、そのために外部者がどのような役割を果たすべきなのかを見ていったが、事例の中でインドネシアの NGO や行政が住民の開発を後押ししている面を見て、外国人である私たちが援助を行うものとして何をすべきかを考えさせられる面があった。

インドネシアの地方では英語でインタビューを行う事が難しく、通訳を介したインタビューをしなければならなかった。そのため基本的な情報の確認に時間がとられてより深いインタビューをする時間が少なくなったことは否めない。3つのグループに分けてインタビュー対象者に対する質問のポイントを確認してもらっていたが、複数の対象者を同時にインタビューする場合にグループを分けて各グループのメンバーが必ず一人は含まれるように配慮したが、その場合インタビュー項目の確認が十分なされないままに質問が行われることになった。後半のインタビューではグループごとに対象者にインタビューを行い、インタビュー後にグループ間で情報共有を行う時間を設けた。限られた時間で知りたい情報を得るためのインタビューの仕方の難しさを参加者は再認識したと思われる。

インドネシアでの海外研修は主にマカッサルで実施され、移動のための時間が必要になった。そのため、海外研修の日程を確保するために出発前の事前研修で事例に関する説明やグループごとの準備作業を行う事ができなかった。ジャカルタ到着後に PKPM の概要説明、出発前にメールを利用してグループ内で視点と質問項目のすり合わせを行い、マカッサル移動後にグループ内で打ち合わせを持ってもらったが、事前の打ち合わせにもう少し時間が取れた方が良かったかもしれない。

5) さいごに

研修を受け入れてくださったプロジェクトの関係者、専門家の皆様、JICA インドネシア事務所、マカッサルフィールドオフィス、タカラール県、NGO、レンケセ集落の皆様には本当にお世話になった。多くの質問にも関わらず、率直に対応してくださったことに、深く感謝している。



3 訪問プロジェクト

1) 訪問プロジェクトの概要

(1) プロジェクト概要

プロジェクト期間：

2004年1月1日から2006年12月31日まで

(2) プロジェクト実施機関：

インドネシア国国家開発計画庁 (BAPPENAS)

(3) プロジェクト対象地域：

東部インドネシア 11州^{*1}

※1 南スラウェシ州、中スラウェシ州、南東スラウェシ州、北スラウェシ州、ゴロンタロ州、マルク州、北マルク州、パプア州、西ヌサテンガラ州、東ヌサテンガラ州の10州に加え2005年1月より南スラウェシ州の一部が西スラウェシ州として独立。現在11州。

(4) プロジェクトの概要（プロジェクトの上位目標）：

「コミュニティのためのコミュニティ開発をコミュニティが考える」ことを促すための支援。

インドネシアにおける国家レベルの開発政策における、政府・NGO・コミュニティの役割や政策策定のプロセスへのコミュニティの参加を理解することにより、インドネシア主体のコミュニティ開発政策「コミュニティによるコミュニティのためのコミュニティ開発政策プログラム」が策定される。

(5) 目標：

東部インドネシア（11州）における、

- i コミュニティのためのファシリテーター育成
- ii コミュニティに役立つエンパワーメント事例の調査、蓄積
- iii コミュニティ主体の活動の実践などの活動を通じて「コミュニティエンパワーメントにおける政府（中央・地方）、NGO、コミュニティの連携が改善される」ことを目標としている。

(6) プロジェクトの背景

【能力開発と地域住民組織の能力強化】

アジア通貨危機における NGO の活用、民主化、地方分権化推進に向けての市民参加等、近年インドネシアの開発分野における NGO の活躍が顕著に増えている。インドネシア政府でも国家開発政策※2 の一環として「NGO 組織強化プログラム」、「住民組織強化プログラム」、「貧困層エンパワメントプログラム」を国家開発の重点プログラムの一つとして定めており NGO を主とする住民組織の強化は国家的な課題となっている。

※2 国家開発プログラム法、2000年-2004年5カ年計画（PROPENAS）

【NGO 連携と国民参加型の開発援助の推進】

また、日本政府も開発協力における NGO の参加を促進しており、Community Empowerment Program (JICA-CEP)、開発パートナー事業などのプログラムを実施し開発協力における公的機関の担い手として活動する機会を拡充・強化している。

【パートナーシップとネットワーク（ノウハウ蓄積）の拡充】

インドネシア国家開発計画庁ではこれら日本の取り組みに着目し、類似のプログラムの実施を通じてコミュニティ開発に関わるステークホルダー（NGO,NPO, 行政官）の住民組織と政府の対話の実現、開発プログラムへの住民参加の促進、ステークホルダー間の連携強化のためのシステム開発や構築のためのノウハウと能力の向上を行うこととなった。

(7) プロジェクトの必要性

【貧困削減】

プロジェクトの対象地域である東部インドネシアは、かつてのジャワ島中心の開発体制の影響から、貧困層※3 が多く、インドネシア政府の開発重点地域となっており、特に草の根住民に直接裨益する支援事業のニーズが高い。

※3 東部インドネシアの貧困者層は 23.30%でインドネシア全国の貧困者層平均 16.66%を大きく上回っている。もっとも貧困者層の多い地域はパプア州の 38.69%で貧困者の少ない地域は南スラウェシ州の 8.94%全国で5番目に貧困者層の少ない地域。

【援助の効率化】

本プロジェクトには、JICA が実施してきた JICA・コミュニティエンパワーメントプログラム※4（JICA-CEP）、スラウェシ貧困村落開発プロジェクト技術協力事業をはじめ JICA が実施したコミュニティ開発分野や参加型開発分野の研修事業などに協力、参加した経験のある関係者がプロジェクトの案件形成及び計画策定段階より数多く参加しており、JICA が培ってきた事業の経験や人材をプロジェクトの実施に効果的、効率的に活用することが可能となっている。

※4 平成 7 年より実施された旧開発福祉支援事業のことを言う。インドネシア国においては 1997 年のアジア通貨危機に伴う緊急支援の一環として平成 10 年度より開始されている。現在では、支援分野も緊急支援からコミュニティ開発に移行し、2004 年 12 月のスマトラ沖地震による津波災害の復興支援などでもインドネシア国内 NGO を通じてコミュニティ開発を推進している。

【政策提言】

本プロジェクトの実施にあたり、BAPPENAS 大臣による「コミュニティ開発政策策定支援委員会設立」の大臣令が発令されており、プロジェクトを通じて改善された「コミュニティ開発モデル」は、国家レベルの政策へ提言することが予定されていることから、本プロジェクトによるインドネシア国内の NGO、住民組織の活動を助長する意義は大きい。

プロジェクトの実施により期待される成果※5：

【研修トレーニング】

政府（中央・地方）、NGO、コミュニティによるコミュニティ開発のための参加型アプローチが改善される。

【調査・研究】

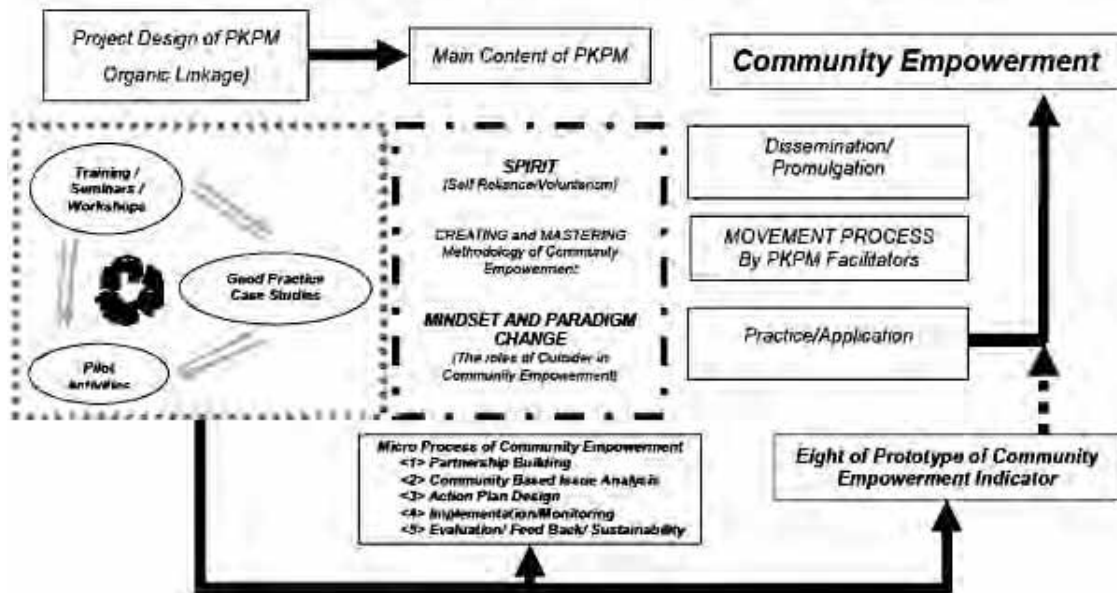
対象地域におけるコミュニティ開発に係る成功事例が蓄積・普及される。

【パイロット活動】

ローカル・イニシアティブに基づいたコミュニティエンパワーメントに係るパイロット活動が開始される。

※5 2005 年 9 月に実施された中間評価において、プロジェクト当初に作成された PDM の修正が行われた。当初計画との変更点は活動プロセスを重視して、研修→実践→調査から研修→調査→実践（住民主体の活動）へと変更、また達成指標についても「取り組み姿勢」「実践力」などの地域イニシアティブを尊重する指標となっている。※次項のプロジェクト概念図（PKPM：From Project to Movement）参照

PKPM : From Project to Movement



2) プロジェクトの実施体制及び技術協力活動

(1) 実施体制

プロジェクト総括：

国家開発計画庁（BAPPENAS）の地方分権化推進局※6（Mr. Ir. Deddy Koespramoedyo, MSc / Direktorat Otonomi Daerah）がプロジェクトの総括責任者（プロジェクトダイレクター）としてプロジェクトにかかる全責任を持つ。また、同局調査役（Pung Parmadi）が、本プロジェクトのプロジェクトマネージャーを担当している。

※6 2005年9月に BAPPENAS 内機構編成が行われ、本プロジェクトの担当部局が地域・セクター開発協力局から地方分権化推進局へと変更となった、なお、担当副大臣は前ポストと同様、ただし大臣は、Mr.Tatag 副大臣から Dr.Ir Luky Eko Wuryanto M.Sc へと変更している。

執務環境：

[PKPM ジャカルタ事務所]

BAPPENAS より PKPM 実施のために専用のプロジェクト事務所（一軒家）の提供を受けている。なお、2006年4月より JBIC の支援プログラムに勤務していた職員が一時的に事務所の2階部分を利用している。



PKPM 事務局（ジャカルタ）



PHD マカッサル

[PKPM マカッサル事務所]

東部インドネシア開発促進のために設立された SofEI/BaKTI（マルチドナーによる東インドネシア情報共有センター）より、PKPM の地域活動モニタリングの推進および他国ドナーとの情報共有を目的に2006年1月より南スラウェシ州マカッサル市内に PKPM Hub Desk（PHD）が開設されている。

地方の人材：

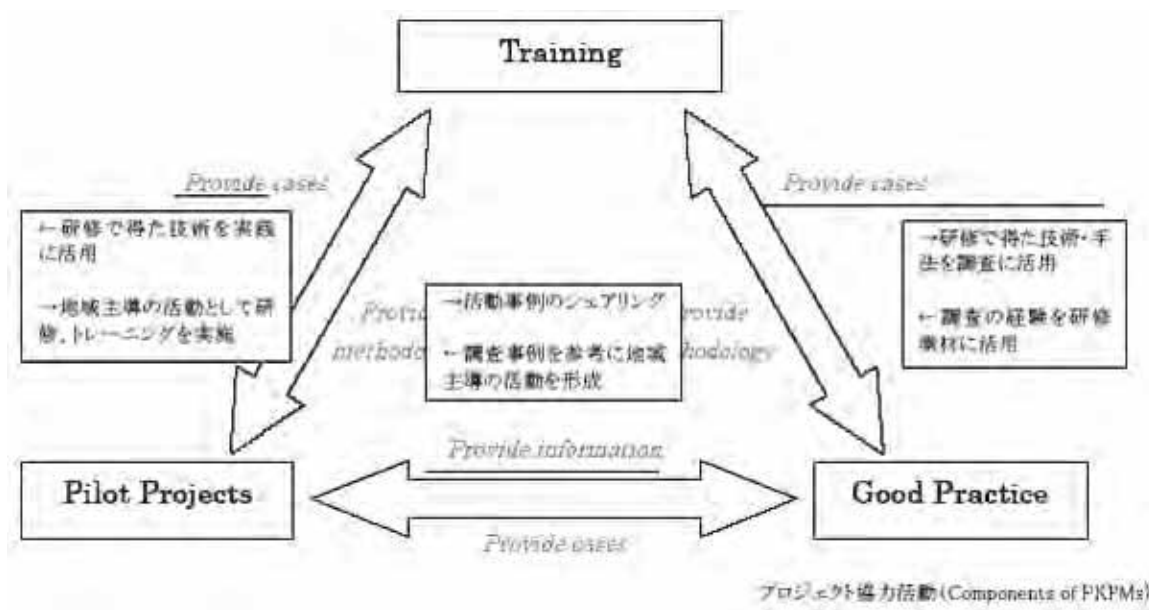
プロジェクトの実施にあたり、中央レベルでは PKPM プロジェクト事務局（Secretariat）を設立しており、地方においては PKPM の活動に参加しファシリテーション能力を身につけた人材が自発的にコミュニティレベルでの活動を展開しており、PKPM 事務局ではこれら地方の人材をマスターファシリテーターと称している。（現在 10 名）

専門家：

日本人の長期専門家 2 名のほかにインドネシア国内で活躍中の NGO 活動家 3 名（ローカルコンサルタントとして備上）の計 5 名が BAPPENAS の PKPM 事務局に配属している。なお、インドネシア人専門家のパートナーとして日本から参加型開発（調査・研究）、NGO/NPO マネージメント、ファシリテーター育成の分野の短期専門家を派遣している。また、本邦から派遣される短期専門家は、国内外で日本の NGO としての豊富な経験を有した専門家が派遣されており、プロジェクトを通じて日・イ NGO 間のパートナーシップ構築に寄与している。

国内支援体制：

プロジェクトで実施する日本研修は、JICA・東京を中心として日本国内で活動中の短期専門家や関連する国内所属機関の協力により、国内各地の自治体、NGO・NPO42団体が PKPM のファシリテーター育成のために NGO マネージメント強化、NPO 連携強化のトレーニングを行っている。



第3 国協調：技術交換

インドネシア国内の研修や日本での研修で得た技術や知識をより広く活用することを目的に、諸外国の市民活動分野で活躍している NGO・NPO8 団体（タイ、ネパール、フィリピン、インド）との情報共有、技術の交換を実施している。平成 16 年度においては、タイ・ボランティア・サービスとの連携により、NGO/NPO の組織運営についての技術交換が実施され、平成 17 年度においてはインド国アンドラプラデーシュ州の NGO ソムニードとの技術交換が行われた。

(2) 技術協力活動

PKPM の活動は、下記の 3 つのコンポーネントから成り立っている。また、それぞれの活動成果は他の活動に反映させるようにデザインされている。

トレーニングプログラム：

コミュニティ開発分野で活動する NGO や地方の行政官に対して、ファシリテーション能力向上のためのワークショップ、研修を実施し、参加型開発に関する知識と技術の向上を図り、実際コミュニティによる活動の企画、計画、実施、評価、シェアリングを促す技術を習得する。

ファシリテーター能力向上トレーニング（インドネシア国内での研修）

Partnership Building “どの様にして村人と友達になるか？”

Community Based Issue Analysis “どうやって村人が村を分析するか？”

Action Plan by community “なにを村人は計画として考えるようになるか？”

Implementation & Monitoring “村人による実施とはどの様なものか？”

Evaluation and Feed back “どうすれば村人は村の変化を意識するか？”

NGO マネージメント、NPO 連携強化（日本国内 NGO、NPO、行政機関での研修）

技術交換プログラム（タイ、インド等の第 3 国における研修）など

グッドプラクティス調査（Good Practice Case Study：GPCS）：

GPCS は、対象地域（東部インドネシア 10 州）における、コミュニティ主体の活動や NGO・NPO の活動を調査し、コミュニティエンパワーメントの要因を把握・検証する活動である。調査の結果は、特にマスターファシリテーターのファシリテーションによる地域内でのシェアリングや他の地域におけるコミュニティ開発（活動）の形成に活用される。なお、GPCS の実施にあたっては、トレーニングで得た技術や知識を実践するとともに実際にコミュニティが調査に参加する機会となっている。

コミュニティエンパワーメント事例調査

NGO キャパシティ調査

パイロット活動支援

パイロット活動は、上記トレーニングプログラムで得た技術やグッドプラクティス調査で得た知識を活用して、実際に自分たちの地域で住民主体の活動を、企画、形成、実施、評価することを支援する活動で、活動の成果は地方分権化政策におけるボトムアップ型のコミュニティ開発の事例として関連するステークホルダーに対しフィードバックすることを目的としている。



西ヌサテンガラ州東ロンボック県事例調査

東ロンボック県における住民ヒアリング

南スラウェシ州ゴワ県バカレエン山巨大崩壊周辺住民が
主体となって計画策定する復興計画策定への助言
（パイロット活動）





南東スラウェシ州 ICT 実践地方行政開発予算を利用したワークショップの開催（パイロット活動）

東ヌサテンガラ州会費制のボランティア・トレーニングの開催
（パイロット活動）



ゴロンタロ州トイディト村
村落開発予算を利用したビレッジプラン作り
（パイロット活動）

3) プロジェクトの進捗・実績状況 (スキーム別実績)

トレーニングプログラム

現地国内研修（累計 2,293 人）

2004 年

- マタラムワークショップ コミュニティエンパワーメント基本コンセプト共有
- クンダリワークショップ パートナリシップビルディング
- クパンワークショップ Community Based Issue Analysis（基礎知識）

2005 年

- グヌンハリムワークショップ Community Based Issue Analysis（実践）
- レンケセ村ワークショップ Action Plan by community - I（演習）
- デウラマヨ村ワークショップ Action Plan by community - II（実践）

2006 年

- クンダリワークショップ Implementation & Monitoring - I（基礎編）
- マタラムワークショップ Implementation & Monitoring - II（実践）

本邦研修（合計 27 名）

2004 年（合計 18 名）

- NGO マネージメント 協力団体：シャプラニール、宮崎食文化研究所、まち・コミュニケーション、ソムニード
- NPO/NPO 連携 協力団体：岐阜県 NPO センター、白川村（岐阜県）
- JICA 集団研修 知識社会創造セミナーへの参加
- JICA 集団研修 Asia Africa Knowledge Creation Program へ講師を派遣

2005 年（合計 9 名）

- Japan Mission※9 NGO マネージメント（NGO Capacity Assessment）

（協力団体：食文化研究所、かみえちご山里ファン倶楽部、評価みえ）

※9 H16 年度に実施した本邦研修（JICA カウンターパート研修）に参加した研修員より、「研修」という言葉から生じるネガティブな点（教えてもらうという受身の姿勢）を回避するために、平成 17 年度の本邦研修では、あえて「研修」という言葉を使わず、自らが目的を持って日本に学びに行くことを重視して、“Japan Mission”と名称した。

- Japan Mission Capacity Development for Community Facilitator

（協力団体：あいあいネット、シャプラニール、まちコミ、ソムニード）

技術交換（第 3 国技術研修）

2004 年（合計 10 名）

- GO-NGO corroboration (9) バンコク、タイ
- Watershed Management (10) インド、アンドラプラディシュ

グッドプラクティス調査/ Good Practice Case Study（業務委託）

2004 年実施

- 女性経済活動グループ事例 - 南東スラウェシ州クンダリ市ポアシア村
- 村落開発支援システム - 南スラウェシ州タカラール県
- 村落給水事業 - 南スラウェシ州ボネ県マタジャン村
- 村落灌漑事業 - 西ヌサテンガラ州東ロンボック県イジョバリ村
- 農民養殖池グループ - 東ヌサテンガラ州クパン県ビポロ村

2005 年実施

- 住民林業活動 - 西ヌサテンガラ州東ロンボック県プリギ村
- 住民給水管理組合 - 西ヌサテンガラ州東ロンボック県ワナサバ村
- 村落間協力協会 - 南東スラウェシ州ソナイ村
- 海洋沿岸資源管理計画 - 南東スラウェシ州トリトリ村
- 村落開発計画 - 南東スラウェシ州バルタ村

2006 年実施中

地方開発予算管理制度 - 南東スラウエシ州開発計画局

住民参加森林管理計画 - 中スラウエシ州トロ村

パイロット活動/ Pilot Activities

南スラウエシ州

※ ゴワ県レンケセ村 Community Based Disaster Management

中スラウエシ州

※ 中スラウエシ州 Bolano 村

西ヌサテンガラ州

※ 東ロンボック県全村プロファイル (一村一リーダー)

南東スラウエシ州クンダリ市

州開発計画局、ローカル NGO による「GO-NGO パートナーシップガイドライン作成」

トリトリ村海洋沿岸資源復旧計画

カインディ村「ビレッジプラン作成」

ゴロンタロ州トイディト村

ゴロンタロ大学講師のファシリテーション能力強化

デュラマヨ村森林管理計画へのファシリテーション

トイディト村開発計画作成への支援

ブンチャック村における Community Based Issue Analysis の実践

ポフワト郡 NGO ファシリテーター育成

ボアレモ県 NGO-GO パートナーシップ構築と協働の推進

オワタ、モンギイロ、ピロラヘヤ、北モンギイロ村落水利用組合活性化運動

ゴロンタロ州県知事研修

パプア州ジャヤブラ県

「コミュニティ開発事例共有活動」

コミュニティファシリテーター育成事業

北マルク州テルナテ県

州開発計画局 「カンポン・ディスカッションプログラム」

東ヌサテンガラ州クパン市

「NGO-GO フレンドフォーラム」

住民組織化（協同組合）能力向上計画

※ PKPM プロジェクトより活動に必要な諸経費（交通費、人件費等）の負担が行われている。

4 海外研修報告会発表

1) インドネシア事務所報告会

11月20日(月)

2) 帰国報告会

11月22日(水)

3) 参加者プレゼンテーション資料

- ・国内研修全体会発表資料(テーマⅠ)
- ・国内研修全体会発表資料(テーマⅡ)
- ・国内研修全体会発表資料(テーマⅢ)
- ・国内研修全体会発表資料(テーマⅣ)
- ・海外研修発表会資料(インドネシア事務所) 1班
- ・海外研修発表会資料(インドネシア事務所) 2班
- ・海外研修発表会資料(インドネシア事務所) 3班
- ・海外研修帰国報告会式次第
- ・海外研修発表会資料(地球ひろば) 全体
- ・海外研修発表会資料(地球ひろば) 1班
- ・海外研修発表会資料(地球ひろば) 2班
- ・海外研修発表会資料(地球ひろば) 3班

- ・ 国内研修全体会発表資料（テーマⅠ）

丁-マ ↓
「住民主体の開発」は
何が「始まっている」？
官家・山田・西田・中村・河村
安田・植田

①
「住民」：
そこに「生んで」いる人々
BUT 様々な住民がいる

②
「主体」
当事者意識
課題意識

③
「住民主体の開発」
「問題解決に進んで」いく
70パー
∴「どのような状態を住民自身が」
つくること!!

- ・ 国内研修全体会発表資料（テーマⅡ）

小取

テ-ア-ア

脚田

上谷・青木 伊東 小堀 瀬尾

相持業

②

がバンスと

かけて

何とく?

①

と心は?

③

- ・ルールがある
- ・伝統を重じる
- ・様々な国の出身力士
- ・裸になった(武器を持たず)
- ・最後は礼儀

④

- ・観客がいる
- ・審判(行司)
- ・懸賞金

⑤

ガバンスと
かけて
何とく。

⑥

キャンプの
カレーづくり

⑦

その心は？

⑧

1. ビジネス
2. 多様性
3. 参加
4. プロセス
5. 応用・バランス

⑩

みんなでつくる

おいしいネ!!!

⑨

バランスと

かけて

何ととく？

⑪

この研修

12

みなさんの
心の中に
...

14

と心は？

13

参加者(住民)と
主催者(行政)の
間をとりもつ検討委員
(ファシリテーター)によって
作り上げた=2日間

15

- ・ 国内研修全体会発表資料（テーマⅢ）

住民主体の開発 = グッドガバナンス

の 実現のため

言者が何を どういう風に考慮すべきか
特に外部者が > (サブコメント)

神解いりか 渡辺英樹 杉本正次

齊藤忠 酒井綾里香 小泉香織

酒井保 伊藤公男

JICA/NGOが.....

。住民との対話を通じて住民と理解
する。

。住民が自らのニーズ主張を他者に伝え
られるように促す。

。住民に第三者としての視点や
情報を提供する。

3

外部者一般

2

。外部者が入った時の住民及び行政間の
関係性に留意する

。外部者が住民に「気づき」「きっかけ」を提供する

。外部者が行政を含む住民が「ビジョン」を描け
ようとする

↳ なければ場を提供する

。外部者が必要以上の投入を行わな
いようにする。

JICA/NGOが.....

4

。各アクターが協働する機会を作る

。地域の文化・慣習を尊重する

。必要に応じて外部リソースを提供する

。信頼構築及び調整のためには十分な時間と
かかる

。上記を含めて退出戦略を立てる。

- ・ 国内研修全体会発表資料（テーマⅣ）

テーマⅣ

①

ガバナンスと住民主体の開発の
実現に向けて

JICAとNGOそれぞれの特徴は
何か？
とれを生かすには？

NGO

③

- ・現場に近い。
- ・法制度へ
- ・アプローチも出来る
- ・打率の問題

②

- 斎藤 大輔 ③ JICA 地球環境部
- 鳥飼 真紀子 ④ (財) 及び保健研修財団
- 竹久 佳恵 ⑤ (特活) AMDA
- 高橋 直郁 ⑥ JICA 社会開発部
- 下田 寛典 ⑦ (特活) 財団法人国際センター
- 名村 欣哉 ⑧ JICA 中国国際センター

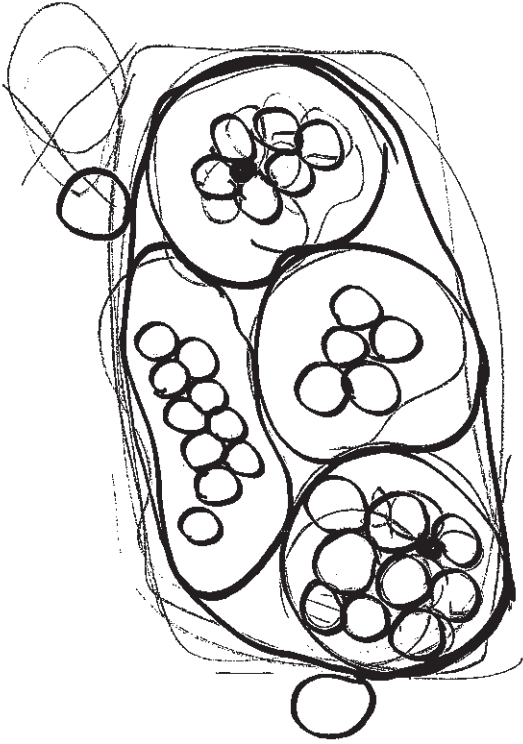
それぞれの特長

④

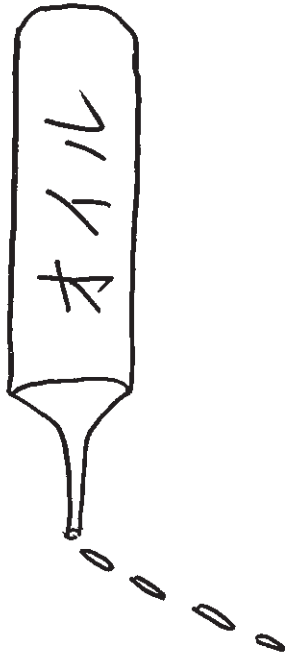
JICA

- ・大きな枠で、様々な
- ・関係者に同時に
- ・アプローチできる。

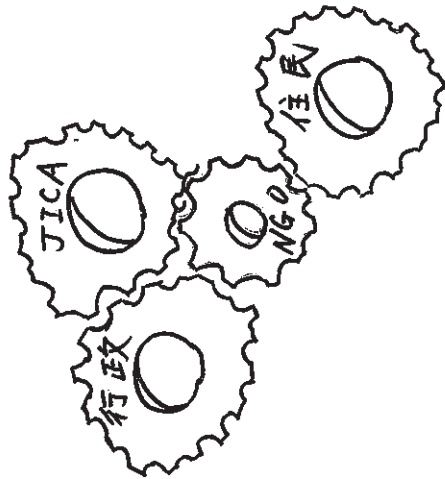
6



5



7



- ・ 海外研修発表会資料（インドネシア事務所） 1 班

NGO-JICA相互研修

一班発表



目次

1. (国内研修からの)問題意識
2. 一班のテーマ
3. 今回の調査概要
4. 結論
5. 分析(3つの視点からのSISDUKとPKPMの類似点、相違点の分析)
6. 結論再び
7. さらに進めて:
 - うまく行ったのはなぜ(～な状態)?
 - もやっとした点/わからなかった点
 - さらに発展した問題意識: NGO、JICAは連携して何ができるか。
 - 住民主体の開発に関して注意すべきチェックリストの作成)

(国内研修からの)問題意識

- ◆国内研修の延長線上(住民主体の開発とガバナンスの関係について分析した。)
 - 行政、NGO、住民の関係について見識を深めたいという問題意識が生まれた:理想と現実について一何が必要なのか?どういう点を気にするとうまくいき、どの点がどうなるとうまくいかないのか?
- ◆何を勉強したいか?
 - 外部者がやっていいこと、悪いこと。
 - プロジェクトがうまく行くコツは?
 - 持続可能な住民主体の開発とは?
 - EXIT戦略は?

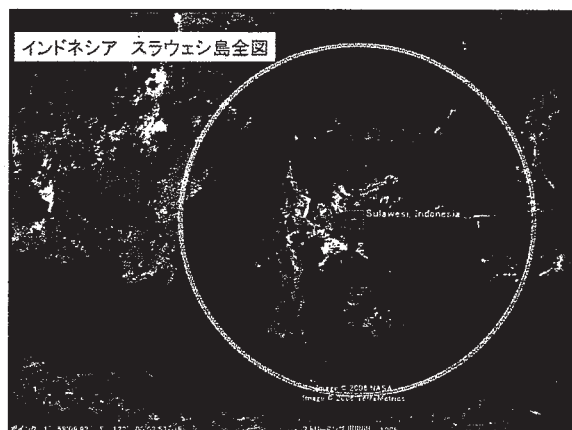
一班のテーマ

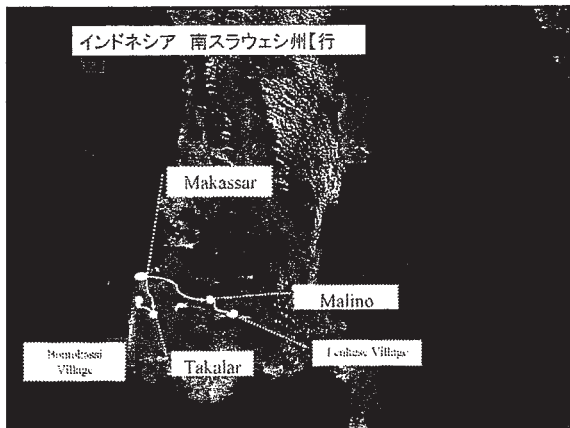
→住民主体の開発のために外部者(外部者:インドネシア以外の人々)は何に配慮して行動すべきか?

(参考)

- ・住民主体の開発:そこに住んでいる人がこうありたいと思う姿を描き、何が必要かを把握し、必要な場合には力を借りながら、主体的に実行する活動:住民の住民による住民のための活動(国内研修より)
- ・外部者とは?:ここでは、住民主体の開発に関わるインドネシア以外の人々を指す。主に、日本のNGO、JICAを想定。

ここで、場所等基本情報の確認。。



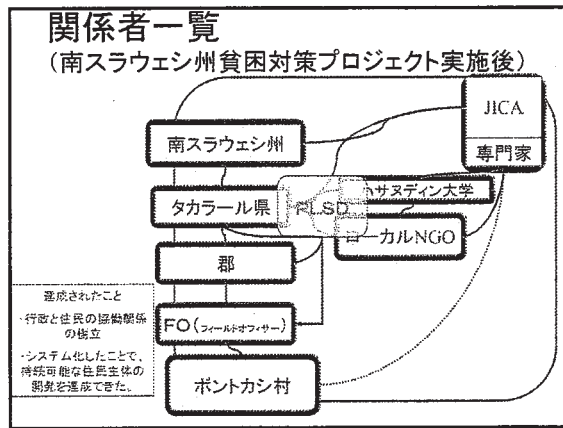
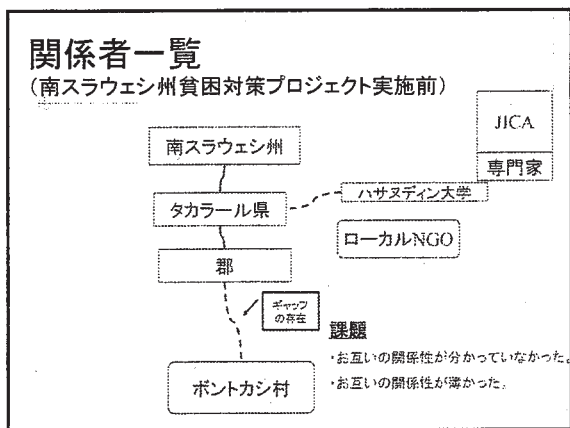


スラウェシ貧困対策開発計画

(活動目標)

カチャーラ県下2郡4村落を対象に、村落住民の社会的能力を高める参加型開発事業の実施

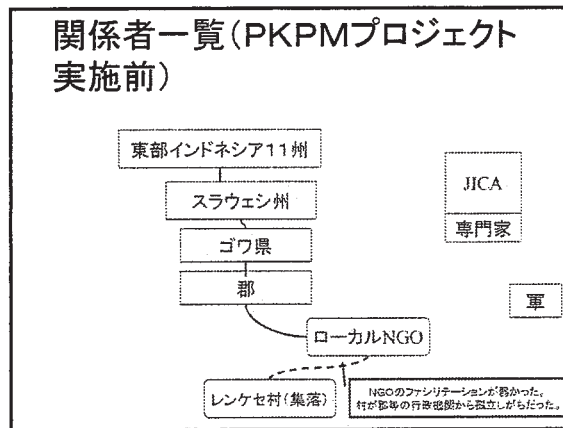
- ②主に州および県村落開発事務所の職員を対象とした研修システムの更新
- ③州および県村落開発事務所による参加型村落開発運営・管理力量の強化



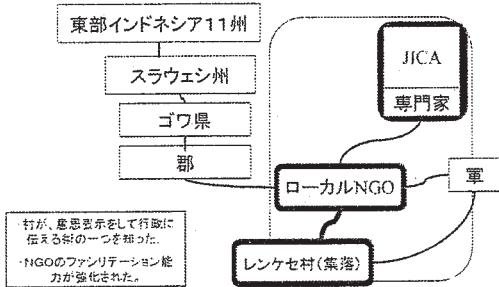
PKPMプロジェクト(目標)

東部インドネシア(11州)における、

- ①コミュニティーのためのファシリテーター育成
- ②コミュニティーに役立つエンパワーメント事例の調査、蓄積
- ③コミュニティー主体の活動実践などの活動を通して、「コミュニティエンパワーメント」における政府(中央・地方)、NGO、コミュニティーの連携が改善される。



関係者一覧(PKPMプロジェクト実施後)



SISDUKとPKPMの関係を簡単に例えると???

・SISDUKプロジェクト

→“ツヴァイ”“オーネ”
システム化されている。幸せになれるときもある
しそうでないときもある。

・PKPMプロジェクト

→“合コン”
システム化していないが、ニーズにあったセッティ
ング、幸せになれるときもそうでないときもある。

もう一度、一班のテーマに戻って。。

私たちが考えたこと

外部者が行動するときに配慮すべき点

- ◆全ステークホルダーと、同じビジョンを共有する状態を目指す。
- ◆財政負担によって相手側の過度な依存心を生まないようにする。(相手側にも応分の負担を求める。)
- ◆他のステークホルダーが他にできないことを行う(本邦研修、中央政府への働きかけ等)。

事例の、3つの視点からの分析

- ◆別紙1参照

ここで結論再び。。。

外部者が行動するとき配慮すべき点

- ◆全ステークホルダーと、同じビジョンを共有する状態を目指す。
- ◆財政負担によって相手側の過度な依存心を生まないようにする。(相手側にも応分の負担を求める。)
- ◆他のステークホルダーが他にできないことを行う(本邦研修、中央政府への働きかけ等)。

さらに一歩進めて。。

うまく行ったのはなぜ？

◆別紙2参照

◆「うまく行った」の定義:

→住民主体の開発ができているか？

(参考)住民主体の開発:そこに住んでいる人がこうありたいと思う姿を描き何が必要かを把握し、必要な場合には力を借りながら、主体的に実行する活動:住民の住民による住民のための活動(国内研修より)

もやもやした点

別紙3参照

さらにもう一歩進めた問題意識

NGOとJICAとの連携について

～NGOとJICAは連携して何ができるか？～

- ◆実施部分については、一部のプロジェクトでは協働がなされているものの、NGOやJICAのそれぞれの制約条件、ポリシー等により、連携が進まないこともある。すでに一部連携も行われている(NGOからの専門家派遣、研修の委託等)。
- ◆少なくとも、NGOとJICAは、情報共有ならびにできる。(例えば、NGOとJICAのグッドプラクティスの共有。)一学びあい、刺激しあい。
- ◆さらに、準備段階と終了後のフォローアップ等についてもNGOとJICAが協力できるのではないか。
* NGO:この場合、日本のNGOを指す。

具体的提案

- ◆(例えば)今回のNGO、JICAの研修で学んだ「住民主体の開発における外部者の役割」について、(NGO、JICA担当者双方に有益な)チェックリストを作成する。
- ◆(例えば)NGOとJICAが共同して、住民主体の開発のコンテキストにおいて、住民のモチベーションを高めるようなコンテストを主催する(SISDUKのポントカシ村の事例より)。

NGO/JICAプロジェクト担当者が、住民主体の開発に関して、注意すべきチェック項目リスト(案)

○当該国/対象地域の状況:

- ◆ 対象地域の経済状況を把握しているか？(ie.村人の裕福さ)
- ◆ 対象地域に影響を与えるような、当該国の政策を把握できているのか(ie.国の地方分権化政策,民主化政策等)？
- ◆ 対象地域の(伝統)文化、気風、慣習、グループ活動をわかっているか(ie.ゴトン・ロヨン(相互扶助)、等)？
- ◆ 対象地域の住民のモチベーションを上げるための行事があるかどうか(ie.農業コンテスト)？
- ◆ 対象地域における外部者の活動を把握しているか(ie.Plan International)？

○人材の状況

- ◆ 地方政府(州政府、県政府等)に、主体者意識を持ったキーパーソンがいるかどうか？(ie.タカラル県知事)
- ◆ やる気、情熱があり、フットワーク軽く村人に接することができる人材がいるか？(ie.PKPMプロジェクトアンガさん)
- ◆ コンセプト(情熱、バランス感覚、相手との距離感、明確なビジョン)を有した専門家はいるか？



- ・海外研修発表会資料（インドネシア事務所） 2班

住民主体の開発とグッドガバナンス ～SISDUK,PKPMの事例を通して～

植田貴子(NGOシャプラニール)
山田千晶(NGOアドラ)
齊藤恵(JICA・地球環境部)

グループ2の研修ねらい

2つの事例(SISDUKとPLPM)通じて、住民主体の開発を可能にするための要素は何かを考える。

私たちの考える 「住民主体の開発」とは？

- ・ 住民自身が、自分達の問題に気づき、その問題に自分達で取り組むことができる
- ・ 「開発」とは自分の内面の変化である
- ・ 「住民主体の開発」には外部者の視点が入っている

事例を見る際の三つの視点

- ・ 住民が自分達の問題を認識し、問題解決に取り組めるよう各アクターの役割
- ・ 各アクターがビジョンの共有
- ・ 開発の持続性

私たちの気づき

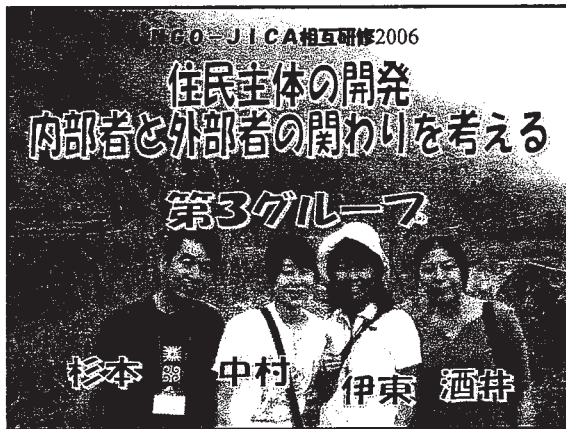
- ・ 融資をもって村に接するFOがいる、ということは重要である。
→ どうしてFOが重要なのか？FOは、村人に直接接する立場であり、村人の真のニーズを引き出す役割として「住民主体の開発」の成功の鍵を握っている。
→ その地域を一番良く理解できる、ローカルNGOやインドネシアの人がFOの役割を担うべきなのではないか。
- ・ 「住民にとって何が重要か」を、政府の中の違うレベルの人々すべてが、認識し、共有して、それに向かって動いていたこと。さらに、トップの人々が情熱を持って取り組んでいた。
→ なぜ共有できたのか。
→ 研修をうける対象者に地域開発に関係する全ての政府レベルの人を巻き込むことができたこと。また、JICA専門家が、政府と粘り強く、尊敬の念を持って関係を構築し、研修を作成したこと。今後、政府の人々が事業終了後も持続していけるという、強付きができた。

表を見てください。
SISDUK版、PKPM版

疑問点

- 双方のプログラムにおいて、住民参加の「住民」っていったいどこまで指すの？主体性を持った住民なのか、コミュニティ全体の住民であるのか。
- PKPMの手法は、他の地域にも村人全員が地域共通の問題を発見しやすかった。
その理由と考えられるのは、レンケセ村は、35世帯という比較的小さな村落であった。また、自然災害という分かりやすい課題に直面した
- SISDUKは、住民の援助への依存の助長にはなる可能性は無いのか。

- ・海外研修発表会資料（インドネシア事務所） 3班



はじめに


【目的】
これはNGO・JICA相互研修において、住民主体の開発現場で、その理念と現実について各関係者・団体間（アクター）に聞き取りを行い、「住民主体の開発とはどのようなものか」を考えたものです。

【期間】
2006年11月13日～22日

【場所】
インドネシア国南スラウェシ州マカッサル周辺

目次

1. 各アクター間の役割等
2. 事例調査
3. 考察
4. まとめ



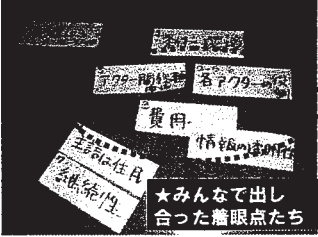
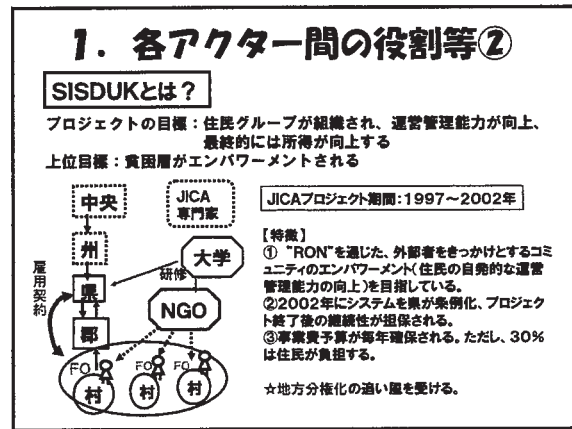
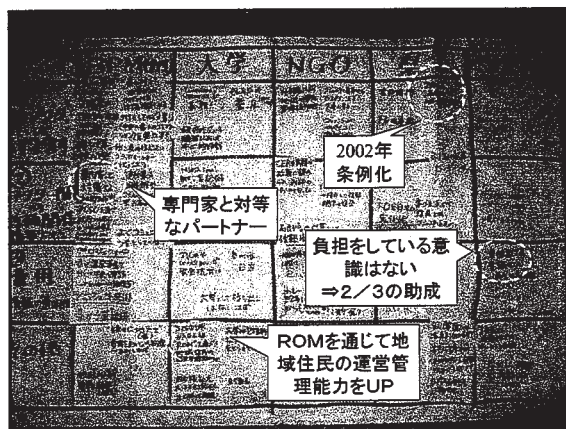
1. 各アクター間の役割等①

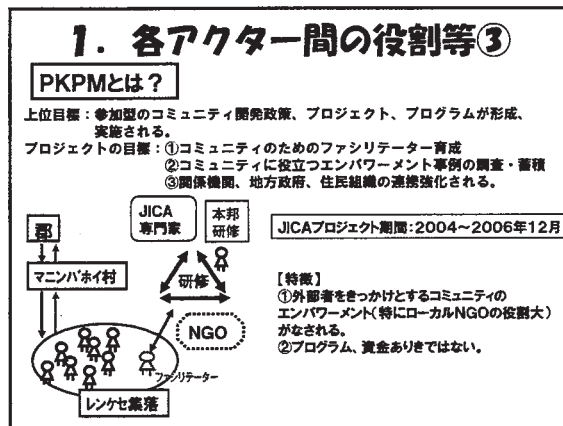
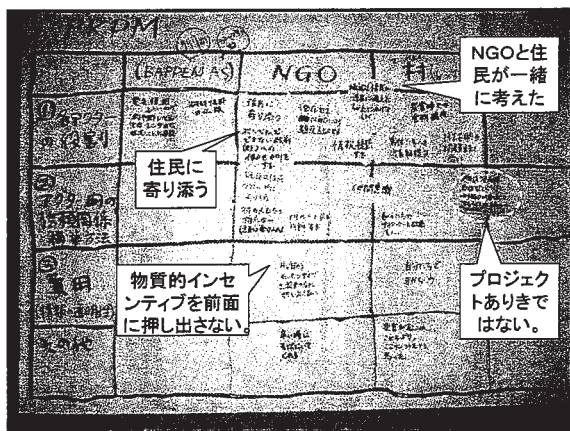
事例調査にあたっての着眼点

ポイント1：各アクターの役割は？

ポイント2：各アクター間の信頼関係構築方法は？

ポイント3：費用はどう捻出？（継続性あるの？）



2. 事例調査① SISDUK実施村の調査 1 / 2

★バジェン村サラカ集落について

- 100世帯 / 450人
- 主に農業 (米・コーン)
- 土地持ち：40%、小作：60%
- 水は井戸にあり)
- 集落内に2つの住民グループ

2. 事例調査② SISDUK村の調査 2 / 2

★調査対象住民グループについて

- 組織化 (Informal→Formal) されたのは、2006年2月
- ミーティングにより、グループのメンバーを10人 (固定) 選出した。
- 肥料・種子の購入を決定、申請
- 8月に政府、260万Rp.の助成
- 9月に購入 10人で均等に分配

借金が減ったぜ

なお、2月以降、グループでのミーティングは行っていない。

2. 事例調査③ PKPM実施村の調査 1 / 2

★マニンバホイ村レンケセ集落について

- 2003年 災害 (地すべり) 発生。
- 32世帯 / 50人
- 主に農業 (米・コーヒー)
- 耕作可能な土地は1 / 3に。
- 農地を完全に失ってしまった人もいる。

→地すべり後、政府からの強制移住の対象となっている。

2. 事例調査④ PKPM実施村の調査 2 / 2

★調査対象女性グループについて

- 意識化 (Informal→Formal) されたのは、災害後の2003年
- それまで農作の補助をしていた女性の仲間20名がメンバー
- 災害前：田んぼで害虫取り など、男性の仕事の手伝いを行う。

- 災害後：防災研修でリーダーを選出。
- 新たなミッション：非難時の食料準備などを行うこと。
- ミーティングは3週間に2回

3. 考察

SISDUK実施村の事例から①

●活動の目的が達成されているか？

- 住民の組織化は為されている。
- (所得向上というよりは)借金が減少した。



3. 考察

SISDUK実施村の事例から②

●懸念材料

【制度の課題】

- 住民グループの組織化は、物質的インセンティブでは？
- 果たして、最貧困層が対象となるのか？
- F Oの短い任期で対応可能か？

【F Oの課題】

- F Oは十分なニーズ調査・問題分析をしているのか？

【マネジメントの課題】

- プロポーザル審査はうまく機能しているのか？
- 支援終了後の活動効果の継続性は十分検討されたのか？
- F Oへのモニタリング・評価は適切に行われているのか？
- F Oが、活動経験をフィードバックする場があるのか？

3. 考察

PKPM実施村の事例から①

●活動の目的が達成されているか？

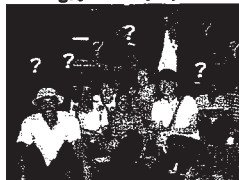
- 地元のNGOが、ファンリテーターとして育成されている。
- 住民自身が自分たちが主体だ、ということに気づき、自分達で考え、行動する必要性を認識した。
- 住民の自主性・自立発展性の向上

3. 考察

PKPM実施村の事例から②

●懸念材料

SISDUKの村のような懸念材料は見当たらない・・・？！



なぜか？

3. 考察

両プロジェクトのアプローチ比較

【共通点】

- ・地元NGOが外部者として村に入る。
- ・村に入るにあたり、研修を受けている。
- ・村にもともと存在するInformalグループに焦点を当てている。
- ・目指す目的は、「コミュニティのエンパワメント」

3. 考察

両プロジェクトのアプローチ比較

【相違

点】	ローカルガバナンスの促進要因	ローカルガバナンスの阻害要因
SISDUK	乗例化 →大きいインパクトを実現	丁寧なファンリテーションがない場合 →単純な資金援助
PKPM	ボトムアップによる住民の働きかけに依りられる	(今回の事例からは発見できず)

3. 考察

内部者として外部者の役割とは？

【内部者(住民)】

- ・「気づき」があること
- 自分たちで考えて、自分達で行動する必要性を住民が認識する。
- 自分たちの潜在的な力に気づく。

【外部者(非住民)】

- ・「気づき」を得るきっかけ作り
- コミュニティのパワーを信じている人材の発掘と育成する。
- 内部者のサポーターとしての存在する。

4. まとめ

住民主体の開発とは？

【信頼関係の構築】

外部から寄り添いながら、住民が求めている情報を必要なときに提供する。(そっと手を差し出す)

【住民主体の開発を取り巻く環境整備】

住民が必要なアクターにアクセスしやすい環境を整える。
→利害関係のない第三者にできること。



住民が、自分達の方で
自分達の問題と向き合い、
自分達で問題を解決すること

4. まとめ

住民主体の開発とは？(続き)

内部者と外部者の
絶妙なバランスによる相互作用により、
「住民パワー」が引き出され、
住民と住民を取り巻く環境が
発展・活性化していくこと

私たちのアクションプランは

広尾での
お楽しみです！

・海外研修帰国報告会式次第

2006年度NGO-JICA相互研修
海外研修 帰国報告会

日時： 平成18年11月22日（水） 10:00～12:00

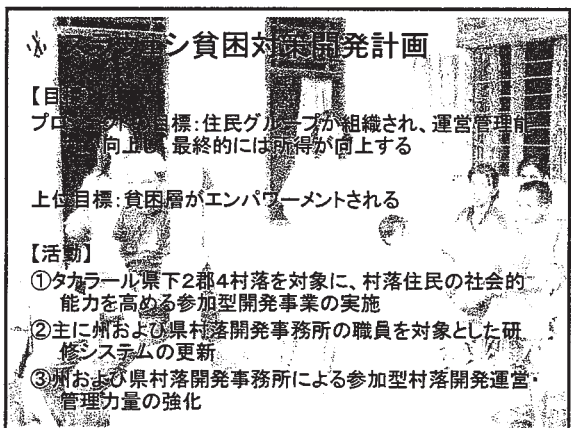
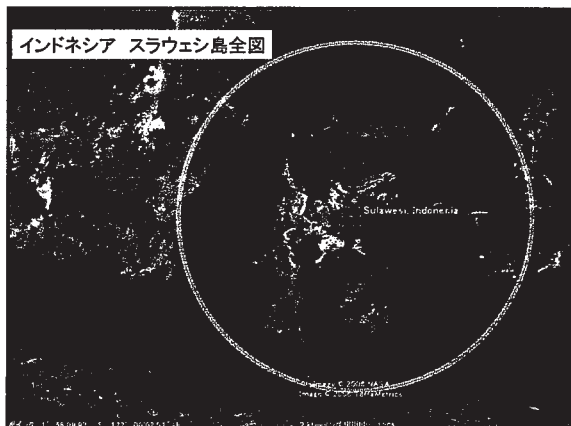
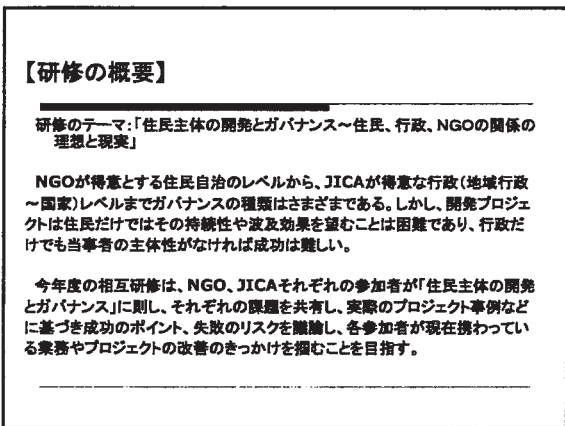
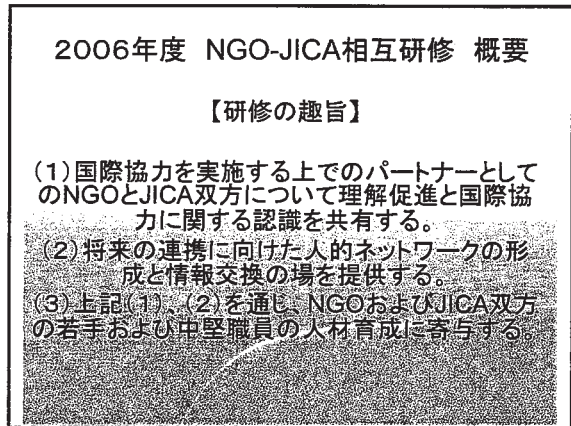
場所： 地球ひろば 講堂

【報告会次第】

- | | | |
|---|--------------|-------|
| 1 | 開会 | 10:00 |
| 2 | 海外研修報告 | |
| | (1) 海外研修概要発表 | 10:05 |
| | (2) 1グループ発表 | 10:10 |
| | (3) 2グループ発表 | 10:40 |
| | (4) 3グループ発表 | 11:10 |
| | (5) 質疑応答 | 11:40 |
| 3 | まとめ | 11:50 |
| 4 | 閉会 | 12:00 |

以上

- ・ 海外研修発表会資料（地球ひろば）全体



注) ※スラウェシ貧困対策支援材落開発計画 (以下同)

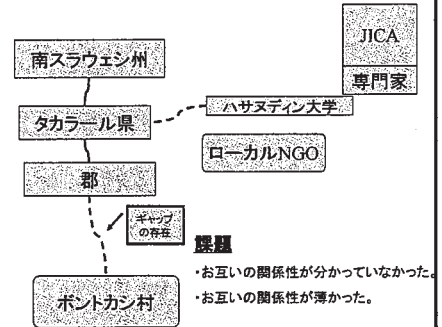
スラウェシ貧困対策開発計画

【特徴】

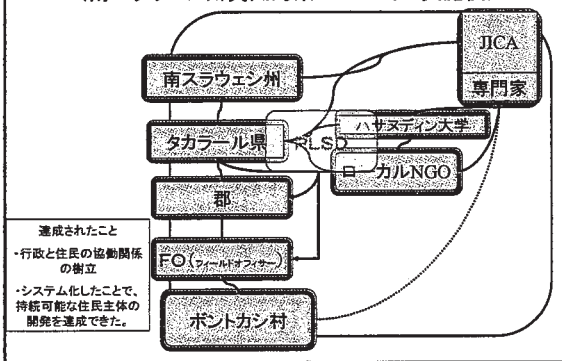
- ① “RON” (Resource Organizing ^{Norm} ~~Network~~ ^{Networking}) を通じた、外部者をきっかけとするコミュニティのエンパワーメント(住民の自発的な運営管理能力の向上)を目指している。
- ② 2002年にシステムを県が条例化、プロジェクト終了後の継続性が担保される。
- ③ 事業費予算が毎年確保される。ただし、30%は住民が負担する。

☆ 地方分権化の追い風を受ける。

関係者一覧 (南スラウェシ州貧困対策プロジェクト実施前)



関係者一覧 (南スラウェシ州貧困対策プロジェクト実施後)



PKPMプロジェクト(目標)

【目標】

プロジェクトの目標

- ① コミュニティのためのファシリテーター育成
- ② コミュニティに役立つエンパワーメント事例の調査・蓄積
- ③ 関係機関、地方政府、住民組織の連携強化される。

上位目標: 参加型のコミュニティ開発政策、プロジェクト、プログラムが形成、実施される。

【活動】

東部インドネシア(11州)における

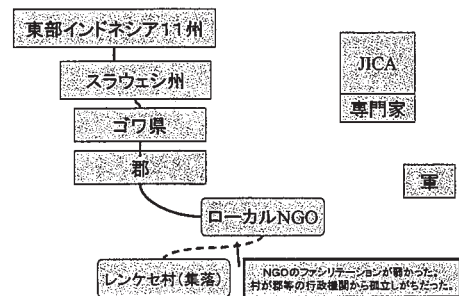
- ① コミュニティのためのファシリテーター育成
- ② コミュニティに役立つエンパワーメント事例の調査・蓄積
- ③ コミュニティ主体の活動実践などの活動を通して、「コミュニティエンパワーメントII」における政府(中央・地方)、NGO、コミュニティの連携が改善される。

PKPMプロジェクト

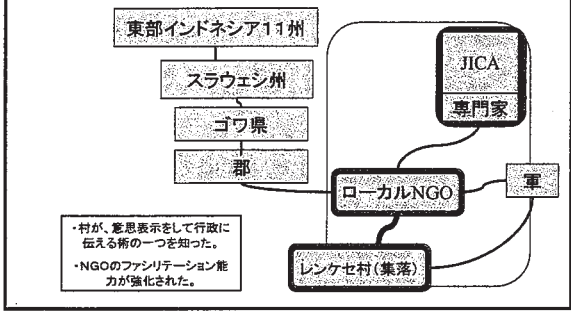
【特徴】

- ① 外部者をきっかけとするコミュニティのエンパワーメント(特にローカルNGOの役割大)がなされる。
- ② プログラム、資金ありきではない。

関係者一覧(PKPMプロジェクト実施前)



関係者一覧(PKPMプロジェクト 実施後)



- ・ 海外研修発表会資料（地球ひろば） 1 班

NGO-JICA相互研修

一班発表



一班: 下田寛典、神藤はるか、
鳥飼真紀子、渡辺英樹

目次

- 1 国内研修からの問題意識
- 2 一班的テーマ
- 3 今回の調査概要(省略)
- 4 結論
- 5 分析(3つの視点からのSISDUKとPKPMの類似点、相違点の分析)
- 6 結論再び
- 7 さらに進めて
 - うまく行ったのはなぜ(～な状態)?
 - もやとした点/わからなかった点
 - さらに発展した問題意識: NGO、JICAは連携して何ができるか、住民主体の開発に関して注意すべきチェックリストの作成)

(国内研修からの)問題意識

- ◆国内研修の延長線上(住民主体の開発とガバナンスの関係について分析した。)
 - 行政、NGO、住民の関係について見識を深めたいという問題意識が生まれた: 理想と現実について何が必要なのか? どういう点を気にするとうまくいき、どの点がどうなるとうまくいかないのか?
- ◆何を勉強したいか?
 - 外部者がやっていいこと、悪いこと
 - プロジェクトがうまく行くコツは?
 - 持続可能な住民主体の開発とは?
 - EXIT戦略は?

一班的テーマ

→住民主体の開発のために外部者(外部者: インドネシア以外の人々)は何に配慮して行動すべきか?

(参考)

- ・住民主体の開発: そこに住んでいる人がこうありたいと思う姿を描き、何が必要かを把握し、必要な場合には力を借りながら、主体的に実行する活動: 住民の住民による住民のための活動(国内研修より)
- ・外部者とは?: ここでは、住民主体の開発に関わるインドネシア以外の人々を指す。主に、日本のNGO、JICAを想定。

SISDUKとPKPMの関係を簡単に例えると???

・SISDUKプロジェクト

→“ツヴァイ”“オーネン”
システム化されている、幸せになれるときもある
しそうでないときもある。

・PKPMプロジェクト

→“含コン”
システム化していないが、ニーズにあったセッティング、幸せになれるときもそうでないときもある。

もう一度、一班的テーマに戻って。。

私たちが考えたこと

外部者が行動するとき配慮すべき点

- ◆全ステークホルダーと、同じビジョンを共有する状態を目指す。
- ◆財政負担によって相手側の過度な依存心を生まないようにする。(相手側にも応分の負担を求める。)
- ◆他のステークホルダーが他にできないことを行う(本邦研修、中央政府への働きかけ等)。

事例の、3つの視点からの分析

- ◆別紙1参照
(外部者が行動するとき配慮すべき点)
- ◆全ステークホルダーと同じビジョンを共有する状態を目指す。
 - 村人自身に考えさせるというコンセプト
 - 関係者に情報提供の場を提供する。
- ◆他のステークホルダーができないことを行う。
 - 地方政府と住民のギャップを埋める。
 - 研修の機会を提供したこと。

ここで結論再び。。。

外部者が行動するとき配慮すべき点

- ◆全ステークホルダーと、同じビジョンを共有する状態を目指す。
- ◆財政負担によって相手側の過度な依存心を生まないようにする。(相手側にも応分の負担を求める。)
- ◆他のステークホルダーが他にできないことを行う(本邦研修、中央政府への働きかけ等)。

さらに一歩進めて。。

うまく行ったのはなぜ？

- ※ 別紙2参照
- ※ 外部者としての働きかけ
一優秀なリーダーやファシリテーターの存在、主体者意識の確立(SISDUK、県知事、PKPM:ローカルNGO)。(例:PKPM)研修を通じた外部者の働きかけ。次回の研修を受けるには、前の研修で学んだことの実践結果のレビューを必須することで、やる気のあるファシリテーターが残るような仕組みにした。
- ※ 「うまく行った」の定義
一住民主体の開発ができているか？
(参考)住民主体の開発:そこに住んでいる人がこうありたいと思う姿を描き何が必要かを把握し、必要な場合には力を借りながら、主体的に実行する活動:住民の住民による住民のための活動(国内研修より)

もやもやした点

- ・別紙3参照
- ・同プロジェクトの他サイト訪問
- ・回答者の本音を言っていたのか？
- ・持続可能性、自立発展性
- ・本当に持続可能性は必要か。
- ・偶然性、外部者の介入の可能性
- ・SISDUKとPKPMを併せると良いプロジェクトになるのか。
- ・本当の住民主体とは？

さらにもう一歩進めた問題意識

NGOとJICAとの連携について ～NGOとJICAは連携して何ができるか？～

- ◆ NGOやJICAのそれぞれの制約条件、ポリシー等により、連携が進まないこともあるが、すでに実施段階で一部連携も行われている(NGOからの専門家派遣、研修の委託等)。
- ◆ NGOとJICAは、情報共有ならびにできる。(例えば、NGOとJICAのグッドプラクティスの共有。)→学びあい、刺激しあい。
- ◆ プロジェクト準備段階と終了後のフォローアップ等についてもNGOとJICAが協力できるのではないか。
* NGO:この場合、日本のNGOを指す。

具体的提案

- ◆ (例えば)今回のNGO、JICAの研修で学んだ「住民主体の開発における外部者の役割」について、(NGO、JICA担当者双方に有益な)チェックリストを作成する。
- ◆ (例えば)NGOとJICAが共同して、住民主体の開発のコンテキストにおいて、住民のモチベーションを高めるようなコンテストを主催する(SISDUKのポントカシ村の事例より)。

NGO/JICAプロジェクト担当者が、住民主体の開発に関して、注意すべきチェック項目リスト(案)

- ◇ 当該国/対象地域の状況:
 - ◎ 対象地域の経済状況を把握しているか？(ie.村人の裕福さ)
 - 対象地域に影響を与えるような、当該国の政策を把握できているか？(ie.国の地方分権化政策、民主化政策等)？
 - ◎ 対象地域の「伝統」文化、気質、慣習、グループ活動をわかっているか？(ie.ゴトン・ロヨン(相互扶助)、等)？
 - 対象地域の住民のモチベーションを上げるための行事があるかどうか？(ie.農業コンテスト)？
 - 対象地域における外部者の活動を把握しているか？(ie. Plan International)？
- ◇ 人材の状況:
 - (+) 地方政府(州政府、県政府等)に、主体者意識を持ったキーパーソンがいるかどうか？(ie.タカラール県知事)
 - ◎ やる気、情熱があり、ネットワーク軽く村人に接することができる人材がいるか？(ie. PKPMプロジェクトアンガさん)
 - ◎ コンセプト(情熱、バランス感覚、相手との距離感、明確なビジョン)を有した専門家(担当者)はいるか？




分らなかった点／もやっとした点

SISDUK	共通点	PKPM
	他プロジェクトサイトの訪問(成功でなく失敗サイトからも)	
	回答者が本音を言っていたのか？	
本当に住民のニーズを汲んだ事業ができるのか？→システム化して良かったの？システムに引きずられていないのだから？	←	システム化されていなくて良いのか？アングさんがいて実施されているプロジェクトではないか？
		行政が同プロジェクトにどう関わっているのか？(県、州のインタビュー希望)
Plan International でも、handicraft groupを作っていた。		
	持続可能性、自立発展性はどちらが本当に持続的？誰がための持続性？	
	本当に持続可能性は必要なのか？	
SISDUK以外の県の意思決定の仕組みは？ボトムアップ？		ローカルNGOの役割(ローカルNGOもやはり外部者？ローカルNGOのExit Strategy)
住民がどれだけエンパワメントされたのか？		
	グループの話し合いでどこまで案を出せるの？偶然性、外部者の介入も多分にあるかも？(ハンディクラフトグループはオランダにも輸出しているが、それがどこまで。。)	
		第二のアングさん(養育のある人)は見つかるのか？(現在、ファシリテーター育成用のハンドブックを作成中。)
	SISDUKとPKPMを併せると良いプロジェクトとなるのか？	
SISDUKは、条例化までの目に見えやすい成果がある。そのため、外から評価するとき、評価しやすいうえに良い評価がもたえられる。		一方PKPMは、対象地域を全部カバーしていない。目に見え易い指標が不在であった。でも、村人に密着して役に立っていることや、ファシリテーター等の人材を少数でもきちんと育成できている。
	ある程度のレベルまでは、外部者が介入しファシリテートしていることは、「住民主体」と言える？	

- ・海外研修発表会資料（地球ひろば） 2班

NGO-JICA相互研修2006

住民主体の開発とグッドガバナンス
～住民・行政・NGOの関係の理想と現実～




グループ2

植田貴子 (NGOシャプランニール)
南アジアの平工芸品の販売促進
山田千晶 (NGOアドラ)
現在ラオス駐在中
齊藤恵 (JICA・地球環境部)
地球ひろば＝気候ホヤホヤ
元NGOのミャンマー駐在員

もくじ

1. はじめに
2. 「住民主体の開発」とは？
3. 3つの視点
4. SISDUKの概要と考察
5. PKPMの概要と考察
6. 事例を見ての私たちの気づき
7. 疑問点
8. アクターの役割
9. アクションプラン(口




はじめに

【研修の目的】
JICA・NGOそれぞれの参加者が、「住民主体の開発とガバナンス」に則し、それぞれの課題を共有し、2つの事例に基づき、成功のポイント、失敗のリスクを議論し、各参加者が現在携わっている業務やプロジェクトの改善のきっかけを掴むことを目指す

【グループ2が特に研修で考えたかった点】
2つの事例(SISDUKとPKPM)の事例調査を通じて、住民主体の開発を可能にするための要素はどんなことなのかを考える

「住民主体の開発」とは？
グループ内で再確認。


住民自身が、
自分達の問題に気づき、その問題に自分達で取り組むことができるということ！！



・「住民主体の開発」とは外部者から見た表現
・「開発」とは自分の内面の変化である
＝住民も含め、関係する全ての人が気づきがある

事例を見る際の三つの視点

- 各アクターの役割
- 各アクターのビジョンを共有
- 開発の持続性



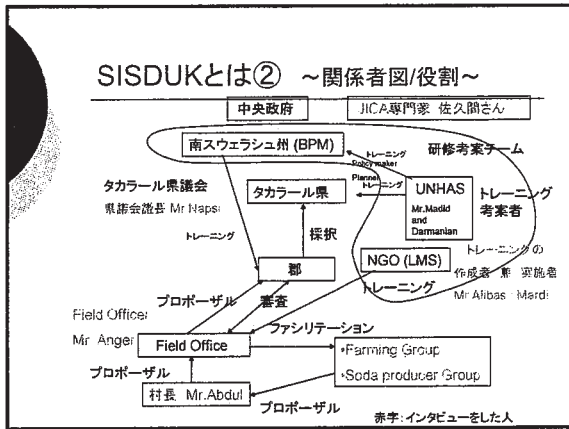
SISDUKとは① ～プロジェクトの概要～

プロジェクトの目標:
地域開発が遅れている村落の生活が住民主体で改善されること

プロジェクトの三本柱:
①インドネシア政府の「参加型開発行政システム」の構築(SISDUK)
②参加型開発研修(PLSD)の開発
③住民の社会的能力を高める住民参加型の事業の実施

SISDUKシステムの流れ:
・住民を組織化し、意識化するためにFOをコミュニティに派遣⇒住民が作成したプロポーザルを郡で助言、審査 ⇒ 県が資金をコミュニティに拠出する。
・このシステムをサポートするために、PLSD研修を大学、州政府、インドネシアローカルNGOが共同で開発⇒関係者の役割ごと4タイプの研修内容を考案(政策決定者・県開発企画者・行政現場担当者・NGOの関係者)考案⇒タイプ毎に研修を実施
これにより、住民を除く関係者全てにプロジェクトのビジョンが共有された

これらは、地方分権化が追い風となり、行政の主体性を促進したその後、このシステムはタカラール県条例として制定され、現在にいたる。



SISDUKについて③

～事例研究から気づいたこと～

ポントラントラ村の2つのグループを訪問、インタビュー
 1)ファームンググループ
 2)ソーダ水製造販売グループ

気づいた点・課題・その他

- 両グループとも直接資金援助を受けることができた。それによって、意欲の向上と収入向上につながっていた(プロジェクト目標は達成されていた)
- FOは1ヶ月に1回のミーティングを持ち、互いの村の問題をシェアしている
- FOは既存のグループを対象としていた
- FOは1人につき2～3村担当し、1年毎に担当の村をローテーションする
- FO個人によってファシリテーションのやり方が異なる

⇒ 既存のグループに入っていない人が取り残される可能性はないのか
 ⇒ FOは元々地域で活動していたローカルNGOと連携がとれていないのではないか
 ⇒ FOはファシリテーションに十分な時間をかけられるのか(今後は1人1村にしていける動きはある)

SISDUKについて④

～事例研究から気づいたこと～

SISDUKシステム運営への疑問

- ⇒ FOが「資金援助」というプログラムを持って村人に接することで、村人の依存心を助長する可能性はないか
- ⇒ プロポーザルの数を行政やFOの評価の対象としていないか
- ⇒ プロポーザルの審査は機能しているのか

・ その他

- ⇒ FOを雇用する際、政府関係者の縁故で雇われることがあるらしい。FOのファシリテーター能力を備えていない人も雇われてしまう

SISDUKとは③

～事例研究から気づいたこと～

事例研究
 ポントラントラ村の2つのグループを訪問、インタビュー
 ・ファームンググループ
 ・ソーダ水製造販売グループ

気づいた点

- 両グループとも直接資金援助を受けることができた。それによって、意欲の向上と収入向上につながっていた(プロジェクト目標は達成されていた)
- FOは1ヶ月に1回のミーティングを持ち、互いの村の問題をシェアしている
- FOは既存のグループを対象としていた
- ⇒ 既存のグループに入っていない人が取り残される可能性はないのか
- システムとして
- ⇒ プロポーザルの数を行政やFOの評価の対象としていないか
- ⇒ 「資金援助」というプログラムを持って村人に接することで、村人の依存心を助長する可能性はないか
- ⇒ FOは1人につき2～3村担当し、1年毎に担当の村をローテーションするためファシリテーションに十分な時間をかけられるのか(今後は1人1村にしていける動きはある)
- ⇒ 元々地域で活動していたローカルNGOとFOの連携がとれていないのではないか
- その他
- ⇒ FOを雇用する際、政府関係者の縁故で雇われることがあるらしい。FOのファシリテーター能力を備えていない人も雇われてしまう

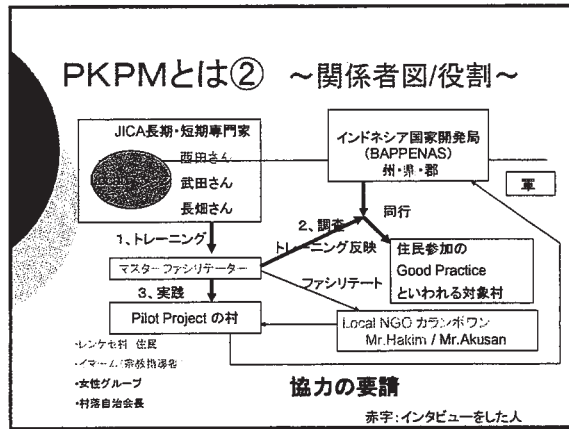
PKPMとは① ～プロジェクトの概要～

プロジェクトの目標:
 「コミュニティのためのコミュニティ開発をコミュニティが考える」ことを促すための支援

プロジェクトの三本柱:
 東部インドネシアの11州において、
 ①コミュニティのためのファシリテーター育成
 ②コミュニティに役立つエンパワメント事例の調査・蓄積
 ③コミュニティ主体の活動の実践などの活動を通じて、「コミュニティエンパワメントにおける政府(中央・地方)、NGO、コミュニティの連携が改善される」

PKPMシステムの流れ:

- コミュニティのためのファシリテーター研修を実施する。研修参加者が住民参加のGood Practiceといわれる村で、研修で得たファシリテーターの知識・技術を実践する。また、その調査の経験が今後の研修の教材に活用することができる。



PKPMとは③～事例研究から気づいたこと～

事例研究
レンゲセ村
村に既存する3グループのうちの1つのグループのリーダー
イマーム(宗教指導者)

- 気づいた点 課題 その他
- 住民自身が問題と思ったことなどが「プログラム」となっている
 - FOが村の仲間として住民に受け入れられている
 - FOは村人の必要に応じて外部のリソース(NGO, JICA, 専門家etc)と村人をつなぐことができる
 - もともと地域に根付いていた助け合いの心(ゴトンヨロン)が存在したため、住民全員の課題を共有し、解決に向けて行動した
 - レンゲセ村は、世帯数も比較的に少なく、自然災害という見えやすい問題であったので、地域共通の課題が気づけやすかった
 - 上記2点を踏まえ、条件の合う村「コミュニティ」でも、PKPMの手法は適応できるかが疑問
 - FOの研修が1回だけで終了するのではなく、フォローアップの機会があった
 - FOの総務を担出できる体制が整っていない
 - JICAのFOに研修があっても、その研修のモチベーションを保持して行くのは難しいのではないかという疑問

まとめ(1)

SISDUK, PKPMの「住民主体の開発」のポイント

- 誰がFOをやるか
⇒ 外部から問題を持ち込むのではなく、住民内部から引き出すことのできる人
例: 「この村には○○が必要だ」という先入観を持ち込まない!
何が問題かは村の人しか知り得ない!!
⇒ 住民に接するFOは地域の状況を理解できるローカル人間の方が望ましい。
地域のことは地域の人が知っている

まとめ(2)

SISDUK, PKPMの「住民主体の開発」のポイント

- ダイナミックな社会の流れの後押しの有無
(例: 地方分権と土砂崩れ)
- 自助努力の精神が残っているコミュニティ (例: ゴトンヨロン)
その村の獲得感情抜きで付き合っている人間がいる (例: アンガーさん)
その村の大切なものを残したいという共通の認識
社会的に味方になってくれる人がいる

疑問点

- 住民参加の「住民」っていったいどこまで指すの? 主体性を持った住民なのか、コミュニティ全体の住民であるのか。
- PKPMの手法は、他の地域にも村人全員が地域共通の問題を発見しやすかった。(その理由と考えられるのは、レンゲセ村は、35世帯という比較的小さな村落であった。また、自然災害という分かりやすい課題に直面した)
- SISDUKは、住民の援助への依存の助長にはなる可能性は無いのか。

JICA・NGOとして何が出来るか。

- NGOとして
- 地域の開発を行っている国内の大学・NPOと現地NGO間の人々をつなぐことができる
 - 地元のことを地元の人がよく知っているという考えから、日本のNGOが村の最前線に出て行くのである同じ志を持った現地のNGOにまかせる

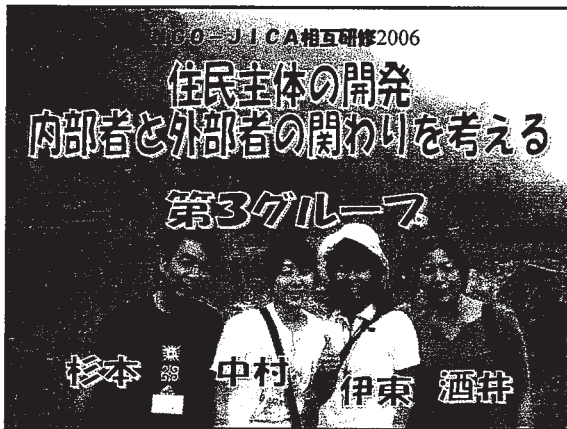
- JICAとして
- 住民の声の受け皿として相手国政府の連携の強化を図る (その方法として、地方高官や政府の様々なレベルの人々とのためにコミュニケーションを促し、また彼らと信頼関係を構築し、一層にプログラムを盛り上げていくこと)
 - JICAが携える技術、研修制度による様々な学びの機会を彼等期間の人々に提供
 - PKPMのような画期的な事業を今後増やしていき、国づくりのリーダーを作っていく! ⇒ 住民主体による開発につながるのではないかと。

事実確認の必要性がありますが、
JICAは、JICAが進めたい目標を現地NGOを通じて行う。





- ・ 海外研修発表会資料（地球ひろば） 3班



はじめに

【目的】
 これはNGO・JICA相互研修において、住民主体の開発現場で、その理念と現実について各関係者・団体間（アクター）に聞き取りを行い、「住民主体の開発とはどのようなものか」を考えたものです。

【期間】
 2006年11月13日～22日

【場所】
 インドネシア国南スラウェシ州マカッサル周辺

目次

1. 各アクター間の役割等
2. 事例調査
3. 考察
4. まとめ
5. NGO・JICAができること
6. 私たち個人ができること

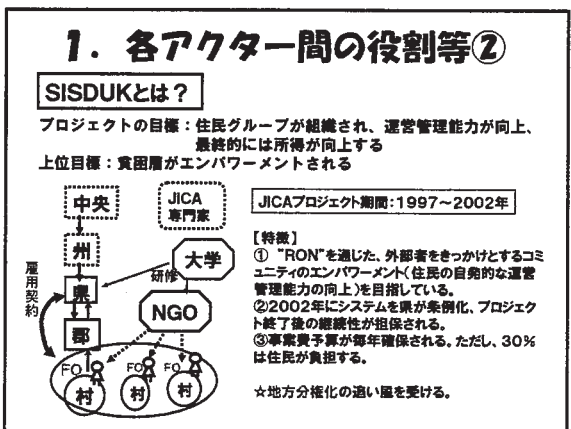
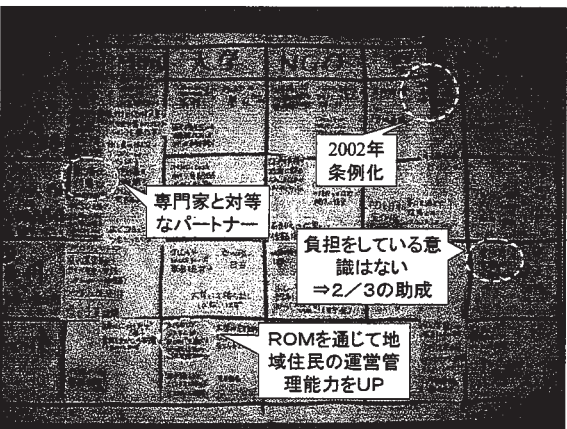
1. 各アクター間の役割等①

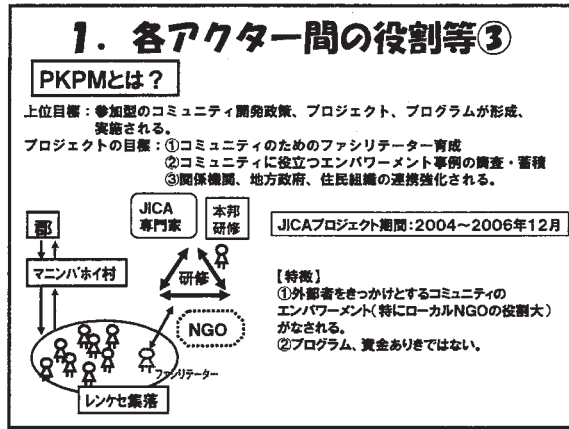
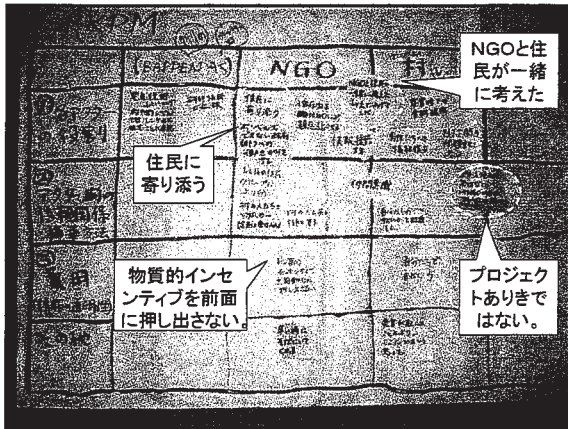
事例調査にあたっての着眼点

ポイント1：各アクターの役割は？

ポイント2：各アクター間の信頼関係構築方法は？

ポイント3：費用はどう捻出？（継続性あるの？）





2. 事例調査①

SISDUK実施村の調査1/2

★バジェン村サラカ集落について

- 100世帯/450人
- 主に農業(米・コーン)
- 土地持ち：40%、小作：60%
- 水は井戸(あり)
- 集落内に2つの住民グループ

2. 事例調査②

SISDUK村の調査2/2

★調査対象住民グループについて

- 組織化 (Informal→Formal) されたのは、2006年2月
- ・ミーティングにより、グループのメンバーを10人(固定)選出した。
- 肥料・種子の購入を決定、申請
- 8月に政府、260万Rp.の助成
- 9月に購入 10人で均等に分配

借金が減ったぜい。

なお、2月以降、グループでのミーティングは行っていない。

2. 事例調査③

PKPM実施村の調査1/2

★マニンバホイ村レンケセ集落について

- 2003年 災害(地すべり)発生。
- 32世帯/50人
- 主に農業(米・コーヒー)
- ・耕作可能な土地は1/3に。
- ・農地を完全に失ってしまった人もいる。

→地すべり後、政府からの強制移住の対象となっている。

2. 事例調査④

PKPM実施村の調査2/2

★調査対象女性グループについて

- 意識化 (Informal→Formal) されたのは、災害後の2003年
- ・それぞれで農作の補助をしていた女性の仲間20名がメンバー
- 災害前：田んぼで害虫取りなど、男性の仕事の手伝いを行う。

- 災害後：防災研修でリーダーを選出。
- ・新たなミッション：避難時の食料準備などを行うこと。
- ・ミーティングは3週間に2回

3. 考察

SISDUK実施村の事例から①

●活動の目的が達成されているか？

- 住民の組織化は為されている。
- （所得向上というよりは）借金が減少した。

●住民グループはエンパ
ワメントされている
か？

- 聞き取った範囲では懸念
材料が多く「YES」と
言いきれない。

購入した肥料
により育つ稲



3. 考察

SISDUK実施村の事例から②

●懸念材料

【制度の課題】

- 住民グループの組織化は、物質的インセンティブに基づく？
- 本当に、最貧困層が対象となっているのか？
- FOの短い任期で丁寧なファシリテートは可能なのか？

【FOの課題】

- FOは十分なニーズ調査・問題分析をしたのか？

【マネジメントの課題】

- プロポーザル審査はうまく機能していたのか？
- 支援終了後の活動効果の継続性は十分検討されたのか？
- FOへのモニタリング・評価は適切に行われているのか？
- FOが、活動経験をフィードバックする場があるのか？

3. 考察

PKPM実施村の事例から①

●活動の目的が達成されているか？

- 地元のNGOが、ファシリテーターとして育成されている。
- 住民自身が自分たちが主体だということに気づき、自分達で考え、行動する必要性を認識していた。
- 住民の自主性・自立発展性の向上

●住民グループはエンパワメントされているか？

- 「YES」
- 聞き取った範囲では、懸念材料が見当たらない。

3. 考察

PKPM実施村の事例から②

PKPMの事例の方が、住民がエンパワメントされているように感じられた・・・？！



なぜだろう？

3. 考察

両プロジェクトのアプローチ比較

住民グループのエンパワメント方法には共通点が多い。

- ・地元NGOが外部者として村に入る。
- ・村に入るにあたり、研修を受けている。
- ・村に既存するInformalグループに焦点を当てている。

しかし、私たちがみた事例ではエンパワメントの深度が異なっていた。

→次の2つの視点からその理由について考察を深めた。

3. 考察

視点1 ローカルガバナンスとの
関わり方からの考察

	ローカルガバナンスの促進要因	ローカルガバナンスの阻害要因
SISDUK	条例化 →大きいインパクトを実現	(丁寧なファシリテーションがない場合) 補助金政策として物質的インセンティブが前面に出やすい点。
PKPM	ボトムアップによる住民の働きかけに応じられた点。	(今回の事例からは発見できず)

3. 考察

視点2 内部者として外部者の役割からの考察 (PKPMの場合)

【内部者(住民)】

・「気づける」こと

自分たちの潜在的な力に気づき、自分達で考え行動する必要性を、住民自身が認識していた。

→主体的であった。

【外部者(非住民)】

・「気づき」を得るきっかけを作ること

コミュニティの力を信じている人材が発掘・育成され、内部者のサポーターとして存在していた。

→住民の「気づき」を引き出した。

4. まとめ

「住民主体の開発」外部者の役割

【信頼関係の構築】

外部者は、コミュニティに寄り添いながら、住民が求めている情報を必要に応じ提供する。(そと手を差し出す)

【住民主体の開発を取り巻く環境整備】

外部者は、住民が必要なアクターにアクセスしやすい環境を整える。→利害関係のない第三者にできること。

住民が、自分達で自分達の問題と向き合い、問題を解決できるようになることを目指すことが大切。

4. まとめ

私たちの考える「住民主体の開発」とは

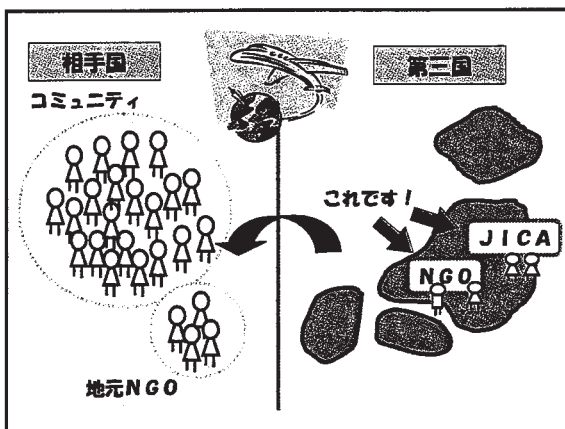
内部者と外部者の絶妙なバランスによる相互作用により、「住民パワー」が引き出され、住民と住民を取り巻く環境が発展・活性化していくこと

コミュニティの現場での経験を踏まえて、必要後、自らの立場から伝えて下さるご意見を大切にしたい。 続く

5. NGO・JICAに出来ること

Q. 私たちの考える「住民主体の開発」を実現するために、NGO/JICAができる強みとは何か？

ここで言う「NGO」「JICA」とは・・・



5. NGO・JICAに出来ること

NGO&JICA両者が共通して出来ること

- ① 住民と行政当局等外部者の間を調整し、連携させる。
- ② 住民が持つ潜在的資源や優位性を気づかせる。
- ③ 村でファシリテーターとなる人材を育成する。
- ④ 住民主体の開発の事例・経験を蓄積し、広めていく。

NGOが出来ること

- ① 日本のNGOの経験を共有することで、地元NGO・住民をエンパワメントする。
- ② 必要とされているところへすばやく支援できる。
- ③ 現地にはない新しいアイデアを提案する。
- ④ 長い目で住民を見守る。

JICAが出来ること

- ① 政府から住民まで、全体を見ることが出来る。
- ② 相手国の政府関係者(上層部)に直接働きかける。
- ③ 国際協力人材リソースの発掘・育成・蓄積する。

6. 私たち個人が出来ること

Q. 私たちの考える「住民主体の開発」を実現するために、私たちが出来ること、今後出来そうなこと、とは何か？

私が考えたことは、

杉本 <small>地域国際活動研究センター</small>	東ティモールや国内支援で住民と希望を語り合うことです。
酒井 <small>アクセス・共生社会を目指す地球市民の会</small>	理解者を増やし、社会を変えていくために、「南」の現状を伝える活動を続けたい。「住民主体の開発」を念頭において、現地生産者グループの自立を見守りたい。
中村 <small>JICA青年海外協力隊事務局</small>	JICAが入ることで、地元住民の混乱（変化）を想定するマインドを持っていたい。「気づきを与える活動」に無理やり成果を求めないでいられるか。（自分への課題）
伊東 <small>JICA国際協力人材部</small>	『住民主体の開発』を実施できる人材を増やすための情報を発信する



5 海外研修を終えて

非常に有意義だったNGO-JICA相互研修

JICA東京業務第二グループ ガバナンスチーム 渡辺英樹

2006年9月14日～16日の国内研修（地球ひろば）、11月13日～11月22日の海外研修を通して、多くの知見及び新たな問題意識を抱くことができた。関係者の皆様への感謝の気持ちを込めて、以下の通り記したい。

研修の中でも、自分にとっては特にインドネシア海外研修が以下の点で非常に有益であった。

第一に、「住民主体の開発のために外部者（註：海外研修では外部者＝インドネシア以外の人々と定義）は何に配慮して行動すべきか？」というテーマに対して取り組み、住民主体の開発における外部者の役割を再認識することができた点である。私が所属した第一グループは、「住民主体の開発」を国内研修での問題意識から「そこに住んでいる人がこうありたいと思う姿を描き、何が必要かを把握し、必要な場合には力を借りながら、主体的に実行する活動：住民の住民による住民のための活動」と位置づけ、そこでの外部者の役割を①全ステークホルダーと、同じビジョンを共有する状態を目指す。②財政負担によって相手側の過度な依存心を生まないようにする。（相手側にも応分の負担を求める。）③他のステークホルダーが他にできないことを行う（本邦研修、中央政府への働きかけ等）、ということであるとの共通理解を導き出した。私自身、JICAのプロジェクト担当者として出張した場合には、M/M締結であったり、運営指導調査団報告書作成であったり各種作業に追われることが多く、そもそもJICA（外部者）としてどう活動すべきか、外部者の役割の再認識の点について広い視野から考える機会は意外に少ない。その意味からも大変に有意義であった。



【南スラウェシ貧困開発計画】

SISDUKプロジェクトの対象村における

住民グループへの聞き取り風景

第二に、海外研修においては国内研修での問題意識を一步進め、NGOとJICAが連携して何を行えるかを検討できた点も非常に大きい。今回、私の所属したグループではNGOとJICA担当者の今後の情報共有の必要性を再認識すると共に、「NGO/JICAプロジェクト担当者が、住民主体の開発に関して、注意すべきチェック項目リスト（案）」を作成した。日頃の業務では、NGO、JICA関係者双方が、膝を突き合わせて真剣に徹底的に議論する場は極めて限られていることもあり、今回のような海外研修を通じて、インドネシアの滞在場所で時には夜中の1時、2時まで議論を戦わせ、グループ内での共通理解が形成できたのは大変に有意義であった。本研修で知り合ったNGO関係者とは、研修が終了した今も情報共有を行っている。



【PKPM】

JICA、NGO関係者間での議論の様子

第三に、ローカルNGOの役割を改めて認識できたことである。特に今回視察したPKPMプロジェクトにおいてはレンケセ村の調査視察を通じて、村外のローカルNGOが村人と外部リソース（軍関係者、行政機関）との橋渡しの役を担い、村人自身による村の問題解決に大きく貢献していることを確認できた。ローカルNGOの一員として活躍しているアンガ氏は、「村人が自分自身で考え、行動し自分自身で問題を解決するためのファシリテートを行っている」と語り、自らはファシリテーター役に過ぎないこと、住民主体の活動が重要であることをインタビューで再三強調していた。ローカルNGOは、一般的に現地により深く入り込めること、現地のコンテクストに合わせて行動しやすいことなどから住民の信頼を得やすく、かつ住民のニーズに合った活動が行える。日頃の日本での業務では、ローカルNGOと接する機会が少なくほぼ皆無であるだけに、このように直接接触する機会は、自らの視野を広げるという意味でも大変有意義であった。

【PKPM案件】ローカルNGOのリーダーのアンガ氏、

2003年にJICA研修(NGOマネジメント)

でも来日経験あり



その一方この海外研修を通じて、自らに新たな問題意識が生まれた。これは研修内容が不十分であったという意味ではなく、今後自ら事業を担当する中で、これらの点に関しての理解をさらに深めたいという意味での問題意識である。こういった問題意識を抱くようになったという点でも本研修に感謝したい。

第一に、「住民主体の開発」というイシューの開発課題における位置づけである。一般的に、「住民主体の開発」と記されると、途上国のオーナーシップといった理念とも連関し、諸手を挙げて歓迎される雰囲気の一部にある。しかし、果たしてそうなのであろうか、同コンセプトの限界等はないのかという疑問が生じた。確かに、インドネシアのSISDUKプロジェクト、PKPMプロジェクトでは、少なくとも訪問したサイトにおいては、（グループ1における定義づけの意味において）「住民主体の開発」が行われていたし、インタビューを行った限りにおいて関係者全体に満足がいく形の結果を生み出していた。さらには、活動における外部者の役割も比較的明確であった。しかし、それらの条件は、比較的安定したインドネシアの社会的状況、関係者の状態等いくつかの前提条件が重なった結果だとも考えられる。しかし、その一方で、住民主体の開発についての限界も考えられるのではないかと思われる。例えば、緊急支援、平和構築期における支援においては、「住民主体の開発」は、どの程度考慮されるべきであらうか。緊急支援においては、住民間のコンセンサス形成に時間を要する「住民主体の開発」を行うことは逆効果になってしまうこともあるのではないだろうか。「住民主体の開発」の開発課題の全体の中での位置づけについて、今後自身の理解を深めたい。

第二に、住民レベルの活動におけるガバナンスのあり方について、もう少し理解を深めたい。たとえば、日本国内においては、「地方自治体と市民社会との協働関係」が最近叫ばれているように、住民レベル（市民社会）と地方自治体がどのように良い関係を築いていくべきかが真剣に議論されている。同分野においては、ある程度の経験の蓄積が進みつつあり、日本の経験を途上国に伝える試みや知識の体系化も、JICAの国内センターを中心に始まっている。そういった動向も踏まえつつ、途上国における住民レベルでの活動におけるガバナンスのあり方についてさらに理解を深めたい。

最後になるが、今回の研修は、NGO・JICA双方の関係者の皆様の多大なる御尽力なしには、成功に終わらなかったと思う。研修中には、運営に関して細やかな気遣いを感じる場面が何度もあった。もう一度、本研修の計画立案及び運営等に携わった全ての方に感謝して、終わりの言葉としたい。

以上

NGO-JICA 相互研修に参加して

JICA 地球ひろばインターン 安田香

資料の準備などに追われながら、慌しく研修初日を迎えた。午後から予定されている事務所相互訪問のため、広尾から JICA 本部へ向かう。初めて入るマイズタワーのオフィスにて、JICA という組織の規模の大きさを改めて実感した。

NGO からの参加者に対して、JICA の組織概要と今後の変化、また JICA が行うプロジェクトの計画から実施までの一連の流れについて JICA 職員が説明を行った。改編の進む組織の仕組みや NGO との連携についてなど、それぞれ自分たちの団体の実情を振り返りながら、率直に質疑応答を繰り返していたように感じられた。

会場である地球ひろばに戻り、本格的に研修が始まってから閉講式を迎えるまでの三日間は密度の濃い、本当にあつという間に過ぎた日々だった。プログラム自体が「濃い」ものであったことに加え、「参加者主体」でグループワークの発表準備も歓談も夜遅くまで行われていたからであろう。参加するあらゆる人々の手によって、準備された研修が形作られていく様を実感した。

今回の研修テーマは、「住民主体の開発」自体の意味、「ガバナンス」自体の意味、両者の関係性の捉え方、NGO と JICA の共通点と相違点、など様々な論点が存在した。グループワークの発表においては、各グループがどの論点をどのような形で位置づけているのか、という点に注目することでそれぞれウェイトをおいているポイントの相違が浮かび上がったことも興味深かった。参加者それぞれが持つ見解の多様性が表面化したかのようで非常に考えさせられるものであった反面、限られた時間のために全てのポイントを均等に取り上げて論じることができなかったことを示しているように思う。やや論点が多すぎてグループ内でもグループ間でも議論が拡散してしまったのではないかという印象を受けた。議論の方向性を限定してしまうことは避けなければならないが、今後はある程度絞り込んだ形でテーマを設定することで、各グループは同一のゴールに向かって議論でき、意見交換も同じ土俵の上で行うことができたのではないだろうか。また研修において、課題を討論し結論を発表することは総括としてももちろん重要だが、意見交換しながらひとつのものを作り上げようとするプロセス自体から得るものが大きかったという参加者の声が多かったことも意識して全体のプログラムを組み立てていくべきだろう。同時に、研修自体の大枠でのプロセスをより重要視して流れをスムーズにしていく必要性を感じた。

事例紹介においては、現地の詳細な様子から事業の大枠にいたるまで非常に多くの質問が相次いで出されていたが、これは現地での様子を日本ではなかなか知ることができないという理由以外に、今回国内研修で紹介された事例が海外研修での訪問対象となっていたことがあったと考えられる。海外研修の事前勉強にもなり、国内・海外研修をつなぐものとしても事例が生きていて非常に良い事例選択といえるのではないか。

研修を終えて最も印象に残っているのが、三日間という短い間に作られた4グループを中心として、最終日には参加者たちが研修前からの知り合いであるかのような一体感を有していたことである。海外からの参加者も含め、年齢も経歴も違う様々な組織で動いている人たちが集まっているというそれだけで、互いの視野とネットワークが広がっていくことを目の当たりにした。普段接することない人々との交流の場を設けられることこそ、本研修の最大の特徴であり、今後もよりよい形での継続が望まれるゆえんであろう。参加者間の関係がその場限りで終わるのか研修後も継続していくのかは参加者次第であろうが、単なる一期一会で終わらせないような動きが生まれてほしいと強く願い、会場をあとにした。

6 参加者アンケート集計結果

古澤めい

海外研修では、国内研修で議論した「住民主体の開発とガバナンス」における重要な視点をもとに、グループごとに大事にしたい 3 つのポイントを挙げてもらい、それぞれについて外部のアクターが配慮すべきことを考え、これらの視点から実際のプロジェクトを見た。ほとんどの参加者がそれぞれの視点について「学べた」と答えており、国内研修で学んだことを実際のプロジェクトを通じて、さらに理解を深めるという海外研修の目的はほぼ達成できたと思われる。また、ほぼ全員が研修の成果を今後の自分の業務に「活かそう」と答えている。

国内研修との関連性も意識されており、特に、これらの視点が具体的なイメージとして考えられるようになったのは、海外研修の成果であろう。一方で、住民主体の開発と並ぶテーマであるガバナンスについては、あまり理解を深めることができなかったとい声も聞かれ、もう少しファシリテーションが必要だったと反省している。次回の課題である。

事前情報については、内容・量・時間量ともに不足ぎみであったという評価が多かった。特に、PKPM のプロジェクトに関しては、スケジュールの関係上、現地到着後の夜にブリーフィングを行なったが、短時間だったこともあり、情報不足だったようだ。加えて、ブリーフィング後におこなった、インタビューについて練るグループワークの時間も短く、プロジェクト把握に時間がかかったのではないかと思われる。

事前課題については適切だったという声が多かった。

今後は、スケジュール作成の際に、事前情報や事前課題の提供に関して、一定の配慮が必要だろう。

スケジュールに関しては、インタビューが多くハードだった一方、分析やまとめの時間が少なかったという感想が見られた。村の滞在時間が短かったという感想もあり、今回のスケジュールでは、村でのホームステイがなかったのも一因かもしれない。

また、全体で共有し、ディスカッションする時間がもっとほしかったという声も聞かれた。今回の研修では、参加者全体でのディスカッションは、中間発表という形で、2 つのプロジェクトを訪問した後だった。今後は、全体でのシェアリングの時間を増やし、例えばプロジェクトごとに作ってもよいかもしれない。

他にあればよかったプログラムとして、(日本の) NGO のプロジェクトを訪問したいというものがあつたが、PKPM は、JICA のプロジェクトではあるが、日本の NGO 関係者が短期専門家が入っており、また現地 NGO のコミュニティとの関わりが見られ、NGO 色の濃いものであるともいえる。その意味で、今回の研修テーマの一つである外部者としての関わりを考えるのに示唆に富んだ事例といえるのではないだろうか。

研修の運営に関しては、直前になって辞退者が 3 人出たということもあり、グループ分けが 4 人、4 人、3 人となり、グループ運営に苦勞したグループもあつた。グループは研修全体を通じて一緒に作業をおこなうため重要であり、今後はいっそう、人数、経験(例えば、JICA にも NGO 出身者がいる)、ジェンダーバランス等に配慮したグループ分けが望まれる。

また、今回は参加者の一人が同時に業務調整員というハードな役割分担になつたが、海外研修に同行する検討委員がもっと役割を担つてもよいと思われる。

今回初めて、英語が通じない地域での海外研修となり、現地のインタビューは、英語—インドネシア語—現地語(場所によって)の通訳を通じておこなつた。通訳の質が問われるという感想が多かつたが、一方で、現地語が入つての通訳は、現地 NGO スタッフのサポートもあり、予想以上にスムーズにいった面もあつた。

研修全体を通じて、参加者は非常に熱心で、夜遅くまでグループワークをしていたのには頭が下がる。しかし、休みたいという参加者もおおり、研修の限界も考慮したうえで、時間のマネジメントは次回への課題である。



海外研修 参加者アンケートまとめ

参加者：11名

I 研修の目的やテーマの達成度について

(1) 今回の海外研修で、「住民主体の開発とガバナンス～住民、行政、NGOの関係の理想と現実～」で大事にしたい視点のうち、以下の3項目についてどの程度理解が進みましたか。5段階でご回答ください。また感想もお寄せください。

①弱者への配慮

【理解度】

1:かなり多くを学べた[0]… 2[4]… 3:ほぼ十分学べた[2]… 4[4]… 5:不足した[0]。

(無回答[1])

【感想】

- ・ 質問の意図が分からない[2]
- ・ 「弱者への配慮」については本研修ではそこまで深く取り上げられなかったように思う[4]→グループで立てた仮説に対する情報を得ることを優先して質問したため
- ・ 住民指針が主体性を持って活動している現場を見れたことは非常によかった
- ・ 住民により根ざした支援という意味で、学ぶことができた

②エンパワーメント

【理解度】

1:かなり多くを学べた[5]… 2[1]… 3:ほぼ十分学べた[4]… 4[0]… 5:不足した[1]。

【感想】

- ・ 住民グループの実際の訪問を通じ、エンパワーメントされている状態がどういうものか体感することができた[2]
- ・ エンパワーメントについては事前論議が無かった
- ・ 人々をエンパワーメントするに不可欠な情熱を学んだ
- ・ PKPM、SISDUKともに大変勉強になった
- ・ PKPMの専門家、ローカルNGOワーカーの姿勢と考え方から、「外務省がそのためにどう関わるか」について多くの示唆を得た。実際の村では意思疎通が難しく、十分に実感することはできなかった
- ・ 住民がその土地で長く生活していく中で、「エンパワーメントされている状態が続くことはよい状態だ」と判断するのは、おしなべて外部者の価値観に依存しているのではないかと新たな気づきを得ることができた

③アクター間の連携

【理解度】

1:かなり多くを学べた[3]… 2[6]… 3:ほぼ十分学べた[1]… 4[1]… 5:不足した[0]。

【感想】

- ・ 特にSISDUKモデルから大変勉強になった[3]
- ・ タカラールモデルの方で、FO(フィールドオフィサー)、アシスタントグループ、村長など多くのアクターが、役割分担しヴィジョンを共有しながら連携している事例をうかがい知ることができた
- ・ PKPMでは行政の関わりを視野に入れられなかった
- ・ 多くの関係者から直接聞き取りを行うことによって、日本で得た知識・資料をより立体的に理解できた部分もあるが、通訳の技術不足や質問の不備、回答者のばらつき等により帰って混乱もした。
- ・ 現地NGOとJICAの連携については不明だった
- ・ 地元の大学や行政関係者を巻き込む際、日本人側がどれだけ青写真を描いているかが重要だと思った

(2) 上記3項目以外で、多く学べた項目があればご記入ください。

- ・ インタビューの難しさ
- ・ 外部条件の動きと住民主体の開発の関連
- ・ 「気づき」を与える場/機会として、外務省/同じ取り組みをしている人との経験交

- 流、研修が有効ということ
- ・ 現地 NGO の活動、存在意義、外部者として援助することの必要性、意味の再考
- ・ ファシリテーターと外部者の役割
- ・ 広く効果を挙げることに、目的が持続していくことの兼ね合いの難しさ
- ・ サステナビリティや出口戦略
- ・ 自分の足りない素養や心がまえ、「準備」が大切だということ。

(3) 今回の研修で得られた事柄は、今後のご自身の業務に取り入れ、活かしていけそうですか。コメントもお寄せください。

1:全てを活かせそう[2]--- 2[1] --- 3:ある程度活かそう[7] --- 4[0] --- 5:あまり活かさない[0]
【コメント】

- ・ 直接には業務に取り入れられないが、学んだポイントや参加者と共有した「住民主体の開発」の考え方は念頭において活動していきたい[2]
- ・ フィリピンで類似した事業を行っているので担当事業を客観的に捉えられ、いいことも悪いことも含めて見えてきた。今後のあるべき関わり方についても大変多くの示唆を得ることができた
- ・ まずは身近なところから援助について考えていきたい

(4) 今回の研修の目的であったのに、達成できなくて残念だったことはありますか。

- ・ 自分自身のタイムマネジメント
- ・ 行政の役割への理解
- ・ exit strategy についての理解
- ・ インドネシアで活動する NGO のプロジェクト
- ・ NGO が行う住民主体の開発のプロジェクトの現場訪問
- ・ JICA や日本の NGO 以外のドナーとの関係性の議論
- ・ 何を見たいか、どのような活動をしているのか、を事前に話し合っグループ内での意識を共有化すること

II 国内研修との関連性について

国内研修があったから海外研修がより充実できたと思いますか。

1. 国内研修に参加したからこそ海外研修を充実させることができた[7]
2. 国内研修との関連性のある程度持って海外研修に臨むことができた[4]
3. 国内研修と海外研修に余り関連性を感じなかった[0]

【感想等】

- ・ 国内研修でテーマを確認して意義の理解を共有できていたので、海外研修にうまく入ることができた[2]
- ・ 抽象的な概念を自分がどう捉えているかの認識を国内で、その実態と現実を海外で、というのは理解しやすかった
- ・ 意識的にリンクさせないと全く別の問題意識で研修に臨んでしまう可能性がありうる
- ・ 国内研修と海外研修の間はいろいろと考えるには十分な時間だった
- ・ 参加者とすでに知り合っていたので、グループ活動も円滑に行うことができた
- ・ 国内研修があったからこそ海外研修でのディスカッションができた。
- ・ イメージや知識と実際に見ることで理解の深みが違った
- ・ テーマ的に関連していたが、作業の中で国内研修の内容は振り返られなかった
- ・ ガバナンスについては海外研修の中で具体的なイメージをもって理解することができなかった

III 事前準備について

以下の設問について、5段階評価及び記述によりご回答ください。

(1) 訪問プロジェクトについての事前情報（郵送・メール送信等）の量は適切でしたか。また感想・改善提案をお寄せください。

【量】

- 1:かなり多い[0]--- 2[0] --- 3:ほぼ適切[5] --- 4[3] --- 5:不足していた[3]。

【感想等】

- ・ メール等が遅く、事前の情報不足により、実際に現地に行った際には事実確認に時間を費やしてしまった。
- ・ 国内研修で扱われたタカラールモデルのほうが事前に理解できていた
- ・ 資料が多すぎて分かりにくい
- ・ JICAの企画・評価部から報告書を借りた
- ・ 質問をあまり事前につめすぎても情報が少ない中では限界があるし、情報があっても的を外れの質問を考えかねないので、質問は現場で徐々に概要から核心へと聞いていき、相手の回答から引き出すのがよいのでは
- ・ プロジェクトの概要についてかなり不足していた
- ・ ペーパーで得られるものには限界がある

(3) 事前課題の量は適切でしたか。また感想・改善提案（事前課題があったことについて及び内容について）をお寄せください。

【量】

1:かなり多い[3]… 2[0] … 3:ほぼ適切[7] … 4[0] … 5:不足していた[0]。

(無回答[1])

【感想等】

- ・ どこまでつめればいいのか分からず不安と心配があったので、課題をどのように反映させることになるのかもっと具体的だとよかった。
- ・ 7つのポイント（視点）の用紙をもう少し早くいただきかった
- ・ グループ分けが国内研修中または終了時に分かっていたら、事前にもっとコンタクトを取れたのでは（自分が海外にいたというのもあるが）。
- ・ 課題の内容を国内研修時に渡してもらえるとよかった
- ・ グループでのやり取りが難しかった
- ・ 事前課題をプロジェクトの把握にしてはどうか
- ・ PKPMについては紙の資料だけでは概要をつかみにくかった
- ・ 国内研修の最後等に、プロジェクト概要についてブリーフィングがほしかった

(5) 現地でのブリーフィング（インタビュー前の現状説明）の内容・時間量は適切でしたか。また感想等があればお寄せください。

【量】

1:かなり多い[0]… [0] … 3:ほぼ適切[3] … 4[6] … 5:不足していた[2]。

【感想等】

- ・ インタビュー対象者に関する情報が不足していた[2]→インタビュー時には対象者についての基本情報ではなくもっと本質的な質問をしたかった
- ・ われわれの班は時間がぎりぎりとなっただけで、適切なものだった
- ・ SISDUK 対象村への訪問の際の事前情報が無いに等しかった
- ・ 海外研修の直前か始めに、1日かけて対象プロジェクトの概要（投入要素、工程、目標など）をブリーフィングしていただく時間があってもよい
- ・ 資料を読んだだけではなかなか理解できないと実感した
- ・ プロジェクトの概要説明をある程度省けば時間短縮が可能だったのではないかと
- ・ もう少し丁寧でもよかった
- ・ ブリーフィングの人、時間、内容は参加者が選べるものではないので、できる範囲でしかない

(6) ご自身で、事前にもっと準備しておけばよかったと思うことがありますか？現実的にできそうであったことがあればご記入ください。

- ・ 2つのプロジェクトの理解[2]
- ・ PDMの調査報告書の読み込みと現状把握
- ・ 通訳があるために時間は半分しかないことを想定し、質問を戦略的に組み立てるべきだった
- ・ JICAのスキームをよく把握しておらず、JICA側の意見をグループに適切に伝えられなかった。

IV 海外研修のプログラム内容について

(1) 全体のスケジュール量は適切でしたか。また感想・改善提案をお寄せください。

【量】

1:かなりきつい[2]… 2[6] … 3:ほぼ適切[3] … 4[0] … 5:十分余裕があった[0]。

【感想等】

- ・ 参加者全員でディスカッションする時間がほしかった
- ・ 短時間で移動がかなり多かったので、身体的にきついところもあった反面、インタビューの時間がもう少しほしいところもあった
- ・ 3日目と4日目が消化不良だった
- ・ 最後の3日間は3～4時間睡眠だった
- ・ まとめる時間が不足していた
- ・ 夜のグループワークのために、日中のスケジュールをもう少しゆったりさせるか、早くホテルに戻れるプログラムだとよかった
- ・ インタビュー対象者は多かったが全体としてはちょうどよい

(2) もっと時間のほしかった訪問場所・プログラムがありましたか？

- ・ 村の訪問時間が不足した[7]→インタビュー、村の日常生活をじっくり理解する時間
- ・ PKPM の政府への訪問もほしかった
- ・ グループワーク

(3) もっと短時間、あるいは訪問しないでも良かったと思う箇所があったら教えてください。

- ・ 表敬訪問[2]
- ・ 州、県、大学関係者へのインタビューはどれか減らしてもよいのでは。聞き取り内容が消化不良であり、最初から日本語で説明してもらったほうが効率的
- ・ JICA 現地事務所での説明会

(4) インタビューは、十分な量を出来たと感じていますか？ 感想・改善提案をお寄せください。

【量】

1:かなり多かった[0]… 2[0] … 3:ほぼ適切[5] … 4[4] … 5:不足していた[1]。

【感想等】

- ・ 言葉の問題（英語と現地語）があり、もう少し時間があったらよかった[2]
- ・ 住民へのインタビューはもっと時間がほしかった
- ・ 不足しているくらいがちょうどよい
- ・ 通訳の質を統一させてほしい
- ・ 特に村落が不足した

(5) 他にあればよかった訪問先・プログラムがあればご記入ください。

- ・ PKPM プロジェクトの行政側カウンターパート（州政府・県政府）への訪問[2]
- ・ PKPM の研修プログラムの受講
- ・ SISDUK とともに大変勉強になった
- ・ NGO が独自に行っているプロジェクト活動地
- ・ インドネシアで活動している日本の NGO
- ・ 村でのホームステイ

(6) 帰国報告会の発表時間は十分でしたか。感想・改善提案をお寄せください。

【量】

1:かなり多かった[0]… 2[0] … 3:ほぼ適切[5] … 4[3] … 5:不足していた[1]。

(無回答[1]←参加していないため)

【感想等】

- ・ 赤松さんのコメントは貴重だった
- ・ 駆け足ではあったがこれ以上長くなくてもよい
- ・ 全体の時間は長めに取ってもよかったのでは

V. 運営・実施方法について

(1) 海外研修の実施時期は、適切でしたか？

ア. 適切[7] イ. 他の時期がいい[3] (無回答:[1])

⇒いつ頃が良いですか？

- ・ 8月ごろ (一番余裕がある)
- ・ 10月か5月ごろ (11月はNGOとして参加するイベントが重なる時期なので)
- ・ 10月ごろ (国内と海外の間に期間が空きすぎている)

(2) 研修の期間 (全体で9日間) はいかがでしたか？

ア. 適切[10] イ. あまり適切でない[1]

⇒何日が良いですか？

- ・ 通常業務を休むことを考えると9日間はベストだが、研修としてはもう少し長くてもよかった

(3) 研修生の人数はいかがでしたか？

ア. 適切[9] イ. 余り適切でない[2]

⇒何人ぐらいが良い？

- ・ 一班につき5人くらいでもよかった

(4) 班分けはいかがでしたか？ (無記入[1])

ア. 適切[5] イ. 余り適切でない[5]

⇒コメント

- ・ NGOよりのグループとなったためにJICA側の視点でものを見る人材が不足し、バランスが悪かった[2]
- ・ NGO側とJICA側の参加者が同数でバランスが取れていた
- ・ 3人は少ない
- ・ 班間で英語力に差があった
- ・ グループを二つにしてもよかったのでは
- ・ 事前キャンセルが多すぎて、結果的に偏ったグループができてしまった

(5) フライト・宿泊施設・現地での移動手段はいかがでしたか？ 全体的な満足度を書いてください。また感想・改善提案もお願いします。

①フライト (利用した時間帯及び航空会社について)

【満足度】

1:十分満足[4] --- 2 [2] --- 3:ほぼ適切[4] --- 4 [1] --- 5:不満[0]

【感想等】

- ・ 帰国便が夜行便でつらかった[3]→体調、発表前の作業
- ・ 機内泊の場合は、帰国後半日くらい休む時間をもらえるとよかった
- ・ もう少し安い航空券もあったはずだが、費用がかなりかかっていた点が気になった
- ・ フライトの時間、航空会社とも満足

②宿泊施設

【研修日程全体を通じての満足度】

1:十分満足[8] --- 2 [2] --- 3:ほぼ適切[0] --- 4 [1] --- 5:不満[0]

【個別の宿などの感想等】

- ・ 快適ではあったが宿の質は高すぎではないか[4]→特にジャカルタは豪華すぎでありマッカサルレベルがちょうどよかった、質を下げて予算を削減してはどうか

- ・ 最終日の地球ひろば宿泊が個室でよかった
- ・ グレードは高かったが、そのぶん疲れが取れた

③現地での移動手段

【満足度】

1:十分満足[7]--- 2 [0] --- 3:ほぼ適切[4] --- 4 [0] --- 5:不満[0]

【感想等】

記入なし

(6) 参加者の皆様に担っていただいた係り（点呼、挨拶等）の量はいかがでしたか？

【量】

1:多すぎる[0]--- 2 [0] --- 3:ほぼ適切[8] --- 4 [0] --- 5:もう少しあってもよい[2]

(無回答[1])

【感想等】

- ・ 各訪問場所でグループ全員が挨拶の機会を与えられたことはよかった
- ・ 割り当ては挨拶くらいだったのでそれほど困難ではなかった
- ・ 参加者と業務調整の兼任はかなりハード

V 今後の取り組み

(1) 来年度、この「NGO-JICA相互研修」で取り上げたら良いと思うテーマがありますか？

所属されている団体から参加させたいテーマはなんでしょうか？

- ・ 平和構築[3]
- ・ キャパシティデベロップメントと社会環境整備
- ・ 参加型開発
- ・ 人間の安全保障
- ・ プロジェクト評価
- ・ モニター
- ・ 各アクターへの実践的なアプローチ手法（ファシリテーションや聞き取りの仕方）
- ・ 南南協力（NGO/JICA が今までのノウハウを第三国にどう伝えていくのか）
- ・ 専門分野をどう活かすのか（より専門的な NGO とマルチな JICA との関係は？）
- ・ 住民主体の開発を可能にするために、村人とどう接したらよいのかという実践研修
- ・ PKPM 研修を日本で受ける
- ・ 地域の開発
- ・ 自然災害や紛争地などにおける緊急支援や人道支援

★その他、事務局の手配・準備等について、また上記質問ではカバーされていなかった事柄について、次回への提言やお気づきの点、改善点などがあればご記入ください。

- ・ もう少し早めに情報がほしかった[5]→渡航手続き、研修自体、宿泊形態、宿泊費、現地で必要になる費用、旅行案内、お土産の持参
- ・ 金銭面でのコストをもっと削減できたのではないかと[3]→宿泊や移動にかかる費用、日当・ホテル・研修の支度料としていただいたお金（←所属団体の寄付として受け取らせていただきたい）
- ・ 通訳の質にはかなり考慮が必要→通訳の技術不足がインタビューの進行と理解促進のネックになった
- ・ 途中発表を行ったことで軌道修正が行え、自分たちの班が気づいていないことに気づくことができた
- ・ お世話になった日本人専門家の方々の熱意とホスピタリティーに心から感動した。長畑さんにはきちんとご挨拶したかった
- ・ 予想していたが体力的、スケジュール的にきつかった
- ・ インドネシアのたばこの煙が気持ち悪くてつらかった（特にレンケセ）
- ・ 最終発表の会場はもう少し狭いほうがよい
- ・ 帰国報告会では、各班の発表に対する専門員とプロジェクト担当者からのコメントが大変に勉強になったので、より多く時間を割いてほしかった

